

六郷山寺院遺構確認調査報告書 I

後山石屋（後山金剛寺）・津波戸石屋（津波戸山水月寺）・大折山（大折山報恩寺）
高山寺（西叡山高山寺）・大谷寺（小溪山大谷寺）・辻小野寺（辻小野西明寺）



1993

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

六郷山寺院遺構確認調査報告書 I

後山石屋（後山金剛寺）・津波戸石屋（津波戸山水月寺）・大折山（大折山報恩寺）
高山寺（西叡山高山寺）・大谷寺（小溪山大谷寺）・辻小野寺（辻小野西明寺）

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

序 文

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では開館以来、「うき・くにさきの歴史と文化」の解明を研究課題としてきた。その具体的な調査研究事業として、中世荘園村落の総合的な復元調査や、古代・中世寺院の考古学的な調査がある。これらの調査の対象は、ローカルであって且つグローバルな展開を遂げた宇佐八幡を核として、直接・間接に培われてきた歴史と文化の研究に他ならない。

平成4年度から3箇年計画で実施する「六郷山寺院遺構確認調査」は過疎やさまざまな開発が進行する国東半島にあって、今ではその所在さえも人々の記憶から消されつつある六郷山の廃寺や無住の寺院を中心に、約20箇寺を選び、遺構の所在・範囲・石造文化財などの確認を行うものである。

六郷山寺院は文献や資料によると、宇佐八幡を中心にして、半島の西側に本山、中央の山岳部に中山、東側に末山が分布しており、各本寺・末寺合わせて64箇寺から成る整然とした三山形式に組織されていたものといわれているが、今日、この点を含め六郷山の成立に関して様々な論議があることは周知の通りである。

今年度の調査は、津波戸山水月寺をはじめとする木山本寺を主体とした6箇寺について実施した。その調査成果は本文に詳細な報告があるが、なかでも特に、六郷山寺院における経塚の発見は、六郷山寺院の成立に新たな視点を提供したのと言えよう。

六郷山寺院への包括的な基礎調査の実施に関しては、遅きに失した感否めないが、本調査報告書が今後の六郷山文化の研究と、文化財への保護・保存に少しでも寄与することができれば幸いである。

最後に、調査を実施するに当たって、ご協力をいただいた各寺院の関係者をはじめ、地元の教育委員会、調査委員の皆様方に対し衷心より感謝申し上げます。

平成5年3月

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

後 藤 正 二

例言

1. 本書は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が平成4年度から3箇年計画でする「六郷山寺院遺構確認調査」における平成4年度分の調査報告書である。
2. 調査は国庫補助を受けて実施しており、平成4年度は六郷山寺院の本山の内、宇佐市の後山石屋（後山金剛寺）、豊後高田市の大折山（大折山報恩寺）、高山寺（西叡山高山寺）、山香町の津波戸石屋（津波戸山水月寺）、大谷寺（小溪山大谷寺）、辻小野寺（辻小野西明寺）の6箇寺を調査対象とした。
3. 調査にあたり、各寺院に関係する住職・総代の方々をはじめ、地元の関係者や各教育委員会の協力を得た。
4. 聞き取り調査には、宇佐市長洲の岡部保夫、入学正敏、入学正則、宇佐市江熊の江熊公徳、豊後高田市の大折融宣尼、脇屋末男、長野裕二、山香町の岩間寛道、安部浩、安部駿一、黒垣利幸、中野英明、小谷健一氏等の協力をえた。
5. 調査にあたり、遺構・遺物の実測、写真撮影は各調査員が実施したが、製図・写真焼き付け等の一部は中須賀貞美、七森寛子等の協力による。
6. 本書の執筆は次のとおりである。

第一章 序説	栗田勝弘
第二章 六郷山寺院の調査概要	栗田
第三章 文書による六郷山寺院の様相—六郷山の成立—	飯沼賢司
第四章 六郷山寺院の考古学的調査	
I 後山石屋（後山金剛寺）	栗田
II 津波戸石屋（津波戸山水月寺）	栗田
III 大折山（大折山報恩寺）	貞野和夫
IV 高山寺（西叡山高山寺）	真野
V 大谷寺（小溪山大谷寺）	栗田
VI 辻小野寺（辻小野西明寺）	栗田
第五章 辻小野西明寺の鬼会	段上達雄
第六章 六郷山寺院の調査成果と課題	栗田

7. 本書の編集は栗田が行った。

本文目次

第一章 序 説	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査団の構成	1
第二章 六郷山寺院の調査概要	3
第三章 文書による六郷山寺院の様相 — 六郷山の成立 —	6
(1) 原始六郷山	6
(2) 天台六郷山の成立	7
(3) 三山形式の整備	11
(4) 六郷山の再編 — 執行の成立と関東祈祷所六郷山 —	14
第四章 六郷山寺院の考古学的調査	19
I. 後山石屋（後山金剛寺）	19
(1) 位置と環境	19
(2) 遺構の状況	20
薬師堂	20
板碑群	20
経塚遺構群	22
人為的な平坦面の遺構	24
第1平坦面～第8・第9平坦面	
(3) 表面採集遺物	30
II. 津波戸石屋（津波戸山水月寺）	35
(1) 位置と環境	35
(2) 遺構の状況	36
津波戸石屋	36
津波戸山旧海蔵寺跡	37
経塚遺構	41
(3) 津波戸山水月寺出土の銅経筒	41
III. 大折山（大折山報恩寺）	44
(1) 位置	44
(2) 沿革	45
(3) 遺構の状況	45
(4) 石造物	47
IV. 高山寺（西叡山高山寺）	53
(1) 位置	53

(2) 沿革	53
(3) 遺構の状況	55
(4) 遺物	55
(5) 石仏等	56
V. 大谷寺(小溪山大谷寺)	57
(1) 位置と環境	57
(2) 遺構の状況	57
VI. 辻小野寺(辻小野西明寺)	58
(1) 位置と環境	58
(2) 遺構の状況	59
奥ノ院と経塚遺構群	59
山王権現	60
観音堂と毘沙門堂	60
坊跡状の平坦面	65
(3) 表面採集遺物	65
第五章 辻小野西明寺の鬼会	69
(1) 修正鬼会	69
(2) 修正鬼会等の用具類	70
(3) 鬼会から見る幕末期から明治期の西明寺	73
第六章 六郷山寺院の調査成果と課題	76
I. 後山石屋(後山金剛寺)	76
II. 津波戸石屋(津波戸山水月寺)	77
III. 大折山(大折山報恩寺)	77
IV. 高山寺(西叡山高山寺)	77
V. 大谷寺(小溪山大谷寺)	77
VI. 辻小野寺(辻小野西明寺)	77

図 版 目 次

第1図	六郷山寺院の主要分布図（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）	2
第2図	調査対象とした六郷山寺院の位置図	5
第3図	『六郷山年代記』能行に関する記事	8
第4図	『六郷山年代記』六郷山成立に関する記事	8
第5図	津波戸山経筒	9
第6図	仁安2年11月日付夷石屋住僧観西解（「余瀨文書」）	13
第7図	屋山院主僧応仁置文案（「道胎寺文書」）	14
第8図	「大神姓都甲系図」（都甲悻孝氏所蔵）	15
第9図	「余瀨文書」	17
第10図	1. 後山金剛寺 2. 後山石屋（後山金剛寺の現薬師堂）	19
第11図	後山金剛寺の遠景（矢印部分）と両戒山（右）	20
第12図	後山金剛寺の薬師堂	21
第13図	薬師堂の東側にある宝篋印塔	21
第14図	薬師堂東側の板碑群	21
第15図	経塚遺構群の近景（東側より）	22
第16図	経塚の石室遺構	22
第17図	経塚の石室遺構	23
第18図	経塚の石室遺構	23
第19図	経塚の石室遺構	23
第20図	後山石屋（後山金剛寺）跡実測図	25~26
第21図	第3平坦面の国東塔身	27
第22図	坊跡状遺構に部分的に積まれた石垣	27
第23図	第4平坦面の土堤遺構	27
第24図	第7平坦面の泉水	28
第25図	第6平坦面の小石を集積した遺構	28
第26図	第7平坦面中央の溝状遺構	28
第27図	第8平坦面の石垣	30
第28図	参道の石段	30
第29図	後山金剛寺表面採集の遺物（1/3）	32
第30図	後山金剛寺表面採集の遺物（1/3）	33
第31図	後山金剛寺遺跡出土遺物写真	34
第32図	津波戸石屋（津波戸山水月寺奥ノ院）2. 旧津波戸山高藏寺 3. 向野庵寺	35
第33図	津波戸山（中央部）と津波戸石屋（矢印）の遠景	36

第34図	津波戸石屋と硯水（左端）	38
第35図	津波戸石屋周辺の石造品	38
第36図	石垣を巡らせた坊跡	38
第37図	津波戸山旧海蔵寺跡実測図	39
第38図	津波戸山旧海蔵寺の石段	40
第39図	津波戸山旧海蔵寺本堂跡	40
第40図	津波戸山鞍部の石室状遺構	42
第41図	津波戸山水月寺土の銅経筒	43
第42図	津波戸山水月寺出土の銅経筒線刻阿弥陀	43
第43図	津波戸山水月寺出土の銅経筒（1/3）	43
第44図	大折山報恩寺位置図	44
第45図	大折山報恩寺の遺構	46
第46図	大折山報恩寺遠望（西北より）	48
第47図	大折山報恩寺参道	48
第48図	塔ノ隈宝篋印塔	49
第49図	仁王像（叶形）	49
第50図	仁王像（阿形）	49
第51図	現観音堂鐘樓門跡	50
第52図	現観音堂	50
第53図	旧観音堂地区宝篋印塔・石祠	50
第54図	旧観音堂跡	51
第55図	旧観音堂地区石段	51
第56図	石灯籠と一字一石塔（右側奥）	52
第57図	風除権現社と拝殿跡	52
第58図	西叡山土器採集地点位置図	54
第59図	西叡山採集資料	55
第60図	小谷地区の丘陵先端にあった応安五年の同東塔	57
第61図	1.辻小野山 2.榎馬場 3.普門坊 4.山ノ坊 5.奥ノ院 6.大谷寺	58
第62図	辻小野西明寺の遠景（矢印）	59
第63図	辻小野寺（辻小野西明寺）跡実測図（1/800）	61~62
第64図	西明寺の現観音堂	63
第65図	西明寺観音堂西側の石砌の基壇	63
第66図	西明寺の石造三重塔と石造品	63
第67図	西明寺の現山王権現	64
第68図	西明寺境内の石積遺構	64

第69図	西明寺の奥ノ院	64
第70図	盗掘された経塚	66
第71図	盗掘された経塚	66
第72図	西明寺屋敷の石垣	66
第73図	西明寺の坊跡の石垣	67
第74図	辻小野西明寺表面採集遺物	67
第75図	辻小野西明寺出土遺物	68
第76図	護符版木	74
第77図	剣と斧	74
第78図	荒鬼面(ア)	75
第79図	災払面(イ)	75
第80図	荒鬼面(ア)	75
第81図	災払面(イ)	75

目 次

表1	修正鬼会逢定の比較	69
----	-----------	----

第一章 序 説

(1) 調査に至る経過

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では、開館以来「宇佐・国東の歴史と文化」の解明を主要な研究主題として取り組んできた。それは、古代から中世にかけてのローカルで且つグローバルな「宇佐八幡」を通じて、発展・展開してきた歴史と文化の解明であった。その具体的な研究としては、中世の荘園村落の復元を試みた田染荘・都甲荘の総合調査であり、寺院跡の調査としては宇佐宮弥勒寺・六郷山本山本寺の智恩寺の発掘調査であった。

今回の調査は国東半島を舞台として展開する六郷山文化の考古学的な総合調査、「六郷山寺院遺構確認調査」である。これは現在、無住や廃寺となつて、所在の判らなくなった山岳寺院跡の往時の位置をまず確認し、寺域や遺構の状態を把握して、これの概略を記録し図化することを目的とした。つまり、六郷山寺院の全体像を押し並べて掴み、これを今後の基礎資料として、個々の研究目的の指針を提供するベースを作っていく作業である。そういう意味で、今年度から3箇年にわたつて、六郷山寺院の本山・中山・末山の各本寺28箇所、各末寺36箇所、合計64箇所の寺院の内、本寺を主体とした約20箇所の寺院を調査対象としている。

この調査は六郷山寺院の一つの研究対象としていく場合、不可避免的な方法でもあり、もっと早い時期に取り組まねばならなかった調査研究事業の一つでもある。今年度からの「六郷山寺院遺構確認調査」が終了した時点で、六郷山寺院の本山・中山・末山の災患とその全体像がおぼろげながらも、見えてくるはずである。

今年度は六郷山寺院の本山の内、宇佐市の後山石屋（後山金剛寺）、豊後高田市の大折山（大折山報恩寺）、高山寺（西教山高山寺）、山香町の津波戸石屋（津波戸山水月寺）、大谷寺（小湫山大谷寺）、辻小野寺（辻小野西明寺）の6箇寺を調査対象とした。

(2) 調査団の構成

平成4年度の調査団の構成は次のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会教育長 宮本高志

調査委員	實川光夫	別府大学教授
	後藤宗俊	別府大学教授
	中野橋能	別府大学非常勤講師
	小田富士雄	福岡大学教授
	関秀夫	東海大学教授
	千々和 到	東京大学教授

調査員 後藤正二 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

田中巳世毅

同

副館長

甲斐彦	同	学芸課長
真野和夫	同	調査課長
渡辺文雄	同	主任研究員
山田拓伸	同	同
段上達雄	同	同
栗田勝弘	同	同
飯沼賢司	同	同
中須賀真美	同	編託
河野典之	豊後高田市教育委員会社会教育課技師	
小倉正五	宇佐市教育委員会文化課主査	
秋吉心良	大分県教育庁文化課主幹兼文化財係長	
清水宗昭	同	埋蔵文化財第一係長



第1図 六郷山寺院の主要分布図(『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による)

第二章 六郷山寺院の調査概要

周防灘に鎧の頭の様に突き出た国東半島は、中央に位置する二子山系から放射状の支谷が発達し、国東二十八谷ともよばれる起伏に富む地形を成している。岩肌を露にして屹立する巨岩と深谷が織りなす自然景観は、一種独特な幽玄の世界を醸しだしている。そしてこの国東半島一帯の山々は、宇佐八幡と六郷山寺院に象徴的な神仏混濁と山岳修験の霊場でもある。

一方、狭隘な谷間を俯瞰すると、発達する棚田と草むらの石造物、数えるほどの村落には神社や寺院が目に付く。まさにこれは、「仏の里くにさき」に相応しい自然景観であり、中世的世界の村落景観をそのまま残す国東半島野外博物館ともいえる。

六郷満山文化とは、この様な峻厳な山と谷で囲まれた安岐郷・武蔵郷・国東郷・伊美郷・末綱郷・田染郷の国東六郷に由来する呼び方であり、天台の山岳仏教文化を意味している。六郷山という呼び名は、養老年間（8世紀初め）に仁聞菩薩によって開かれたという伝承を持つ、二十八霊場を総称したものと【八幡宇佐宮御託宣集】によると仁聞菩薩は八幡大菩薩の応化神であるとも言われている。そういう意味で宇佐八幡と六郷山寺院との深い関係は「宇佐・国東の歴史と文化」を研究するうえで看過しえない興味ある課題である。

六郷山に関する文献では、長承4年（1135）の『夷山住僧行源解文案』が初見である。「六郷御山・本山・満山大衆」などと表記された中に、六郷山の組織的な繋がりを読み取ることが出来る。また、安貞2年（1128）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』には六郷山の組織が「本山分」15箇所、「中山分」16箇所、「末山分」2箇所に分化されている。その内、六郷山本山の6箇所、中山の13箇所は石屋・岩屋と呼ばれる洞窟を表象とした呼称であり、中世山岳寺院の初期形態のあり方、つまり山岳修験の霊場との深い関係を暗示していると言えよう。

一方、後世の作といわれている仁安3年（1168）の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』には「序分本山八箇寺」、「正宗文（分）中山十箇寺（正しくは9箇寺と1房）」、「流通文（分）末山十箇寺」の28箇所が挙げられている。これ等は全てに「山」号を付す呼称法で統一されている。また、同日録には「本山分末寺」として16箇寺と2房、「中山分末寺」として8箇寺と1房1院、「末山分末寺」として8箇寺の計36箇所が組織されている。つまり、六郷山寺院は総計64箇所の寺院から成り立っている。

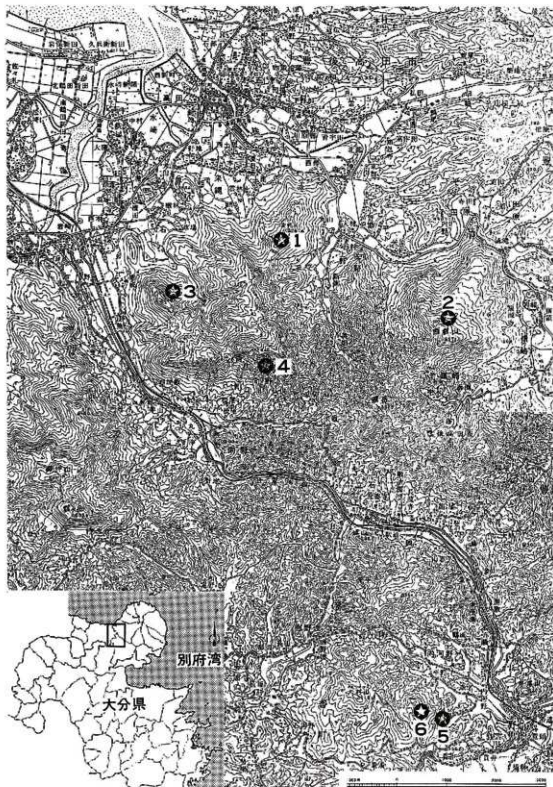
建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次第四至等注文案』や仁安3年の目録によると、いわゆる本山、中山、末山の分布は宇佐八幡宮を起点にして、半島の西側一帯に本山、中央部の山岳地帯に中山、半島の東側一帯に末山が分布している。中野橋能成^(註)は、六郷山が本山→中山→末山へと順次に造立されていった根拠として、寺領が宇佐宮領→弥勒寺領→国衙領へと進出していった状況を掲げている。そして、これを修験霊山の三山組織と捉え、「本山は学侶の山、中山は修業の山、末山は衆生済度の山」と指摘している。

今回の「六郷山寺院遺構確認調査」の対象とした寺院は、安貞2年の目録の「本山分」15箇所の内、「後山石屋・津波戸石屋・大折山・高山寺・辻小野寺・大谷寺」の6箇所である。これ等

は、仁安3年の目録で言い換えると、「序分本山八箇寺」に含まれている宇佐市の後山金剛寺、山香町の津波戸山水月寺、豊後高田市の大折山報恩寺・西叡山高山寺と、「本山分末寺」に含まれている山香町の小溪山大谷寺・辻小野西明寺に相当する。

現在、これ等の寺院は、大折山報恩寺と辻小野西明寺が無住の寺であり、残りの4箇所は廃寺となっている。今回の調査の主な目的は、いわゆる本山に所属している6箇寺の位置をまず確認し、聞き取りや踏査で寺域の範囲や構造を把握して、可能な限りこれを図化していくことであった。しかし、無住や廃寺を対象としているため、鬱蒼とした藪の中を分け入り、目的地を捜し当て、寺域を把握する作業は思ったより難航した。実際、高山寺（西叡山高山寺）、津波戸石屋（津波戸山水月寺）、大谷寺（小溪山大谷寺）に関しては、関連資料や有益な情報を得ることができたが、往時の寺跡の遺構を確定することは出来なかった。しかし、当初、点としてしか把握されていなかった、後山石屋（後山金剛寺）では極めて良好な寺院跡と経塚遺構群を発見し、寺域の伽藍配置も図化することができた。また、大折山（大折山報恩寺）や辻小野寺（辻小野西明寺）でも、寺域の範囲や坊跡を把握し、一部を図化している。特に、辻小野寺（辻小野西明寺）では、奥の院の後背地に経塚を意図的に埋置した遺構群を確認しており、津波戸石屋（津波戸山水月寺）、つまり、水月寺奥の院の上方にあたる、津波戸山の鞍部から出土したと推察できる永保3年（1083）の経筒をはじめ、後山石屋（後山金剛寺）でも伽藍の最奥部の高所に位置することから、経塚の埋納場所を奥ノ院とその周辺（六所権現・山王権現・薬師堂等）にパターン化して捉えることが可能となった。この傾向は、金剛山長安寺、旧千燈寺、富貴寺、横城山東光寺等でも指摘できる。

注 中野権能著『八幡信仰史の研究 上下巻』吉川弘文館 昭和五十年



第2図 調査対象とした六郷山寺院の位置図

1. 大折山（般若寺）、2. 高山寺（西嶺山高山寺）、3. 後山石屋（後山金剛寺）
 4. 津波芦石屋（津波芦山水月寺）、5. 大谷寺（小溪山大谷寺）、6. 辻小野寺（辻小野西明寺）

第三章 文書から見た六郷山の様相 — 六郷山の成立 —

(1) 原始六郷山

六郷山の寺々は、養老2年(718)に仁聞菩薩によって開かれたという伝説をもつ。中野幡能氏は、仁聞は「神母」であり、比売神の法名であるとして、ヒメ神を祭る巫僧集団すなわちその法統を継ぐ人々を「にんもん」と呼んだのだと主張するが、筆者としてはこの説を肯定することはできない(『八幡信仰史の研究』増補版)。詳しく別稿を期したいが、仁聞については、『八幡宇佐宮御託宣集』(『託宣集』と略す)の記述にしたがって八幡の応化、化身と見ておくべきであろう。

『託宣集』では、六郷山は仁聞とそれに従った法蓮・華嚴・胎能・覚満が修行した場所であるとする。就中、法蓮は『続日本紀』に2回登場する有名な僧侶である。大宝3年(703)に、法蓮に医術の賞として豊前国荒野40町を与えられ、養老5年(721)に法蓮の一族三尊親に宇佐君が与えられた。彼は、『託宣集』では、宇佐弥勒寺の初代の別当であり、宇佐の山本の虚空蔵寺の僧侶と記され、彦山とも縁がある。彼は流浪の行者として彦山の般若石屋に籠もり、彦山権現から如意宝珠を得たが、翁に化けた八幡に玉を請われ、それを承諾して、八幡の神宮寺の初代別当になったというのである。また、法蓮は、養老4年(720)の大隅単人の反乱の際に、彦山権現と協力して、八幡の神輿と合流して単人を平定したともある。

法蓮は、山林に入り、修行する僧侶であり、六郷山も8世紀初めには、法蓮に象徴される行者集団が入り、彦山と同じく行場として開かれていたかもしれない。法蓮ともに修行したという華嚴・覚満・胎能は、法蓮が山本(現宇佐市山本)で虚空蔵菩薩を信仰したように、華嚴は郡瀬(現宇佐市法鏡寺)の法鏡寺で如意輪観音を崇め、覚満は、米郷(現豊後高田市)で薬王菩薩を崇め、胎能は六郷山において薬師如来を崇めたことあり、宇佐周辺に拠点をもった僧侶である。彼らは法蓮のように確実な史料でその存在を確かめられない人々であり、同時代の人であるかも明らかでないが、この地域に古代の寺院があったことは考古学の調査によって確かめられている。

例えば、法鏡寺は、8世紀前半の寺の存在が確認されている。米郷でも、1991年度の知恩寺調査でも9世紀の瓦が発見され、その外にも、奈良時代まで通る瓦を出すカワラガマ遺跡や10世紀代の瓦を出すヤコージ遺跡などが存在する(大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館報告書『智恩寺』)。胎能の六郷山が奈良時代に存在したかは伝説の彼方であるが、山香町向野の津波戸山の麓には、日豊線の複線化工事にともない発見された10世紀代の向野廃寺跡などある。

いずれにしても、『託宣集』の世界の六郷山は、伝説の闇に包まれ、奈良時代以前の六郷山の姿を明らかにすることはなかなか困難である。おそらく、9世紀以前の六郷山は、山岳寺院としては確立しておらず、宇佐周辺平地にある古代寺院を拠点とする僧侶集団の行場の域を出るものでなかったと推測される。

六郷山がやや具体的な姿が見え始めるのは、9世紀の半ばに活動した能行という僧侶からであ

る。「八幡宇佐宮御託宣集」巻11に次のような記述がある。

文徳天皇五年、齊衡二年乙亥二月十五日、豊後国六郷山は、昔八幡薩埵、人間菩薩として、久修練行の峯なり。中比、聖人有り。能行と名づく。俗姓は宇佐氏にして、豊前国の人なり。天長二年乙巳神和天皇二年なりより、齊衡二年乙亥迄、春秋三十一年、皇曆一万余日、彼の山に住せしめ、難行苦行を致す。久しく此の身を摧き、功を積み、徳を采めと雖も、未だ人間菩薩を拜せず。巡礼の次第を知らず。爰に件の山中、津波戸の石屋に於て、五躰を地に投げ、遍身に汗を流し、六時に懺法し、発露滯泣す。第三七日の夜、四五更に向ふの尅、異香室に満ち、電光山に耀く。晴天の下、石屋の上に、相好端嚴の粧を顕はし、耆老碩学の僧と現れて、告げて言く。

我は是れ、昔此の山に行ぜし行者なり。汝罪障已に滅し、機感時至るが故に、吾來り告ぐる所なり。此の山に修行するに、二つの路有り。後山の岩屋より始めて、横城に至るべし。又海路辺地を経巡るべきなり。我昔の修行此の如し。但し東三郷安岐・武蔵・津守郷は、西三郷伊美・采麻・田樂郷は、此山の敷地なり。生を此の地に受ける群類は、皆是れ昔の同行の知識なり。結縁既に深し。得脱近きに在り。勸進の人たり。敷地四至の内に殺生を諫止せしむべきなり。又法音を断たずして、後仏の出世を待つべし。跡を留めむ僧侶は、各此の峯を護持して、聖跡を巡行すべきなり。吾は是れ、昔の人間菩薩・弥陀如来なりてえり。(原漢文)

安貞二年(1228)五月の六郷山日録では、津波戸石屋で能行に仁閑が瑞相を放ち、峯巡礼の次第を告げたとあり(長安寺・千燈寺所藏)、鎌倉時代の始めには、このような伝説ができあがっていたことがわかる。この峯巡礼は今日伝えられる峯入りのルートと考えられ、この話は、宇佐氏の一族である能行という僧侶が国東の山々における修行の形を確立したことを伝えていると考えられる。能行の段階に寺が成立していたかは明らかでないが、六郷山木山（むぎやま）の高山寺のものといわれる10世紀代の木彫聖観音立像があり、寺の活動が10世紀には始まっていたとみてよいであろう。しかし、天福寺奥の院(宇佐市黒)や天念寺(豊後高田市長岩屋)の両子岩屋に安置された仏像を見ると、すぐれた仏像があってもそれが直ちに伽藍をもった寺の存在を示すのではないことは明らかである。初期の寺は岩屋や小さな堂を中心とした行場の延長の中で造られたとみるべきであろう。

(2) 天台六郷山の成立

このような原始六郷山が組織化されるのは、12世紀のはじめである。慶長年間終わりに成立した『六郷山年代記』(長安寺所藏)には次のような記事が見られる。

〔永久元年条〕

六郷山、始めて天台無動寺を号す(原漢文)

〔保安元年条〕

六郷山、延暦寺寄進 六月十日(原漢文)



第3図 「六郷山年代記」 能行に関する記事



第4図 「六郷山年代記」 六郷山成立に関する記事

永久元年（1113）に天台の無動寺の末寺となり、保安元年（1120）には、無動寺から延暦寺に寄進されたという意味であろう。現在残る六郷山関係の遺物では、11世紀末から12世紀初頭に大きな画期があったことが推定される。六郷山の寺院の奥の院を中心に経塚が営まれるのがこの時期からであり、永保3年（1083）鉦の津波戸山の経筒、大治5年（1130）鉦の高山出土経筒、保延7年（1144）鉦の屋山長安寺出土の銅板法華経などがその代表的なものである。また、六郷山における初期の仏像造立も12世紀前半に中心がある。その例としては、永久5年（1117）鉦の辻小野山西明寺の木影毘沙門天像、大治5年鉦の長安寺の太郎天童（屋山太郎惣大行事）などである。特に12世紀初頭の遺物には、「天台僧良胤」（大治5年高山出土経筒、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館発行展示図録『弥勒憧憬』参照）、「天台僧圓尋中禅坊」（大治5年太郎天童）と天台僧とわざわざ記したものがあり、天台僧の活動によって六郷山の寺々が整備されていった様子が窺える。

六郷山の名称についても、永保3年（1083）の津波戸山の経筒には「於津波戸山」と記すが、その前に六郷山の文字は記されていない。それに対して、大治5年（1130）の高山出土の経筒では、「六郷高山」と記され、長安寺銅板法華経では「鎮西豊後國六郷御山屋山」と記している。12世紀の史料でも「六郷山」の名を必ず記すものではないので断定はできないが、「六郷山」の名の確実な初見が同じく12世紀初頭にあることは注目しておく必要がある。

それでは、天台末六郷山がなぜこの時期に成立したのであろうか。国東半島の大部分は宇佐宮および宇佐宮弥勒寺領であった。そこに所在する六郷山は当然のことながら、宇佐宮特に弥勒寺と密接な関係をもった寺院であり、この時期の天台末六郷山の成立も弥勒寺との関係において考えなければならない。

弥勒寺は11世紀の前半講師元命のときに、藤原道長の力を得て元命が石清水八幡宮の別当を兼帯することによって中央と深く結びついた。この過程で、法華経信仰が弥勒寺の中に取り入れられ、弥勒寺内に法華経を安置する新宝塔院が白河天皇の御願で建立され、永保元年（1081）には、この年落慶供養が行われた。この供養に先立ち、天台座主から弥勒寺の二人の僧に対して法華供養法が授けられ、かれらは塔の供僧となった（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館発行図録『弥勒憧憬』）。この時期から、弥勒寺と天台との関係が急激に強まってゆく。そのことを象徴するのが津波戸山における経塚造営である。弥勒寺新宝塔の落慶供養の二年後、永保3年（1083）に宇佐宮大宮司宇佐公相をはじめとする神官・僧侶が経塚の供養を行っている。ここは、宇佐氏の出自である能行が仁聞菩薩に峰巡礼の路を授けられ、法華経書写のための硯水を発見した場所である。そのような場所に経塚が営まれたことは注目しなければなら



第5図 津波戸山経筒

ない。永保元年（1081）の宝塔建立の意識したこの経塚はおそらく六郷山最初の経塚であり、天台の六郷山を成立させる前提となったものと推定される。

新宝院建立のときの弥勒寺講師兼石清水八幡宮別当成信は、元命の子息で真言系統の僧であったが、彼の跡を継ぎ、石清水八幡宮別当となった頼清は天台座主頼源を師主とする天台系統の僧侶であり（石清水祠官系図）、弥勒寺や九州北部の弥勒寺関係の寺院では、11世紀末から12世紀にかけてより天台色が強まっていった。そのような中で、北部九州では、天台の僧侶の活動が活発となり、爆発的に経塚が営まれていった。また、寺院自体も天台延暦寺の影響下に置かれるもの増え、八幡勢力と天台勢力が対立する事件も起こるようになる。

長治元年（1104）10月19日に宋人に物を借りるという口実で、延暦寺の僧侶法楽禪師の配下が龍門山大山寺の荘園に乱入し、乱行を働いた。長治年間（1104～6）、慶朝法印が天台座主のとき、東塔の法楽禪師は、悪僧の首領となり、比較山一山の実権を握った。大山寺も法楽が強引に別当の地位を就いたと称したため、この法楽の一派の方人になるものがあり、当時大山寺別当を務めていた八幡別当光清と対立し、光清はこの一味を捕らえるように大宰府に要請した。しかし、大宰府の官人がかれらと結託してこの訴えをとりあわなかったため、光清は12月8日に中央に訴えた。そこで検非違使庁から長治2年（1105）正月に大宰府に通達があり、大宰府権帥藤原季仲と検非違使左衛門尉範政が彼らを抑えようと龍門へ向かったところ、合戦になり、季仲・光清の目代（代官）方の矢が龍門社の神輿を射て、日吉社神人や龍門社神人を殺害した。

この件で、権帥藤原季仲が召還されたが、延暦寺宗徒は季仲・光清・範政の流罪を要求して陽明門に参集した。一方、八幡神人も待賢門に参集し、光清の無罪を訴えて、双方が大乱闘になった。この事件は、一大権門である石清水八幡の別当光清を除いて、季仲以下の関係者は遺流などの厳しい処分を受け終結した（以上『中右記』）。

龍門山大山寺は、八幡別当光清の父の頼清も別当に任じられ、八幡宮の支配を受けてきたが、『中右記』長治2年（1105）10月30日条では「大山寺は天台之末寺なり」という注記があるように、最澄が計画した天台六宝塔院の一つ安西宝塔院が建立された天台の拠点の一つであり、八幡と天台の複雑な二重支配を受けていた。この事件はこのような複雑な支配の中で、天台内部の融和派（統制派）と天台中心主義の武闘派の対立によって引き起こされたものと推定される。康和4年（1104）に天台座主に任じられた慶朝法印は、石清水八幡宮勢力と融和を計り、八幡別当頼清を大山寺別当就任を認めたが、本山人衆を掌握した法楽禪師などの武闘派はこれに反発し、山上の実権を掌握した。すでに、慶朝法印の座主就任のときから、この対立があり、法眼寛慶や阿闍梨頼禅などが座主追放を要求した。この背景には、法楽に代表されるように、合戦を好み、諸国の山門末寺荘園の所職を兼任し、僧兵・俗兵士を従え、たえず都鄙を往来しつつ、山門領末寺荘園の全国ネットワークの拡大を計ろうとする大衆勢力とそれを抑さえようとする統制派の勢力の対立が存在し、山門は「大衆の張本」「悪僧首」とよばれる末寺荘園支配に実力を発揮した勢力に主導権を奪われていったのである（戸田芳実『中右記』そしえて）。

六郷山の天台末寺化はこのような12世紀初頭の情勢の中で進められた。先にも述べたが、北部

九州では、この時期に天台僧を中心とする経塚の造営が盛んになされる。六郷山においても埋経活動を通じて、巡礼する岩屋の段階から天台僧の主導で山々に本格的な寺院の建立が進んだのもこの時期でなかったろうか。六郷山の寺では、講堂や権現の付近に経塚が営まれる形態がほとんどであり、寺と経塚が不可分な関係で成立したことは明らかである。その意味で、六郷山の天台末寺化は、六郷山の支配をしてきた弥勒寺への天台勢力の扶植と天台延暦寺大衆勢力の末寺在園支配の拡充の中という動きの中で、直接的には天台大衆勢力の影響下にある「天台僧」が主導する法華経の埋納行為である経塚造立を通じて、進んだものであると考えられる。

(3) 三山形式の整備

保安元年(1120)の延暦寺寄進以後、六郷山は寺院組織が急激に整備されたと推定される。個々の寺院の伽藍の整備はもちろんであるが、寺院群の組織化が進んだ。

六郷山には、三山形式の独特の寺院組織が存在する。三山とは、熊野三山・出羽三山に似たもので、六郷山を三グループに分けて、本山(もとやま)、中山(なかやま)、末山(すえやま)に区分する形式である。平安末の仁安3年(1168)の目録から室町時代の目録までさまざまな六郷山の目録に記載されるものであるが、仁安3年の六郷山目録は近世の作とされ、信用がおけない(『大分県史』中世2)。この目録では、六郷山二十八寺を序分本山八箇寺、正宗分中山十箇寺、流通分末山十箇寺に3グループに分け、さらにそれぞれの山の末寺を記載している。この二十八箇寺は法華経二十八品に寺を対応させたものであり、序分・正宗分・流通分とは、法華経二十八品を三区区分する方式である。この目録の内容は、法華経の構成に寺の構成を当てはめたきわめて観念的な目録のもとなっておりと同時にこの時代にはふさわしくない寺号山号の記載形式をとっており、問題がある。

現在、基本となる目録・注文は、安貞2年の目録、弘安7年の祈禱巻目録、嘉元2年の注文、建武4年の注文であるが、これらに記載される形式の三山が整備されるのも、12世紀の段階と推定される。

長承4年(1135)3月21日の僧行源解案には、「本山住僧 五人」という本山(もとやま)の記載と屋山・長石屋・黒土石屋・四王石屋・小石屋・大石屋・夷石屋・千燈石屋などの中山(なかやま)の寺院の僧侶の記載がある(「余瀨文書」)。これは僧行源の申請を受け、満山大衆が僧行源開発私願の安堵を行ったものであり、六郷山満山大衆の審判であった。六郷山には、鎌倉時代以降の六郷山の目録に見られるように、熊野山三山・出羽三山に似た本山・中山・末山の三山形式の組織があったが、この文書はその存在を推測させる。また、『六郷山年代記』長承元年(1132)の記事では、正月15日から豊後・豊前の牛が死亡して、西国の牛がいないという状態になり、六郷山の本山と屋山に置かれた大般若経の転読が衆徒先達580人によってなされた。この史料からも本山と屋山を中心とする中山グループの存在が見えるが、先の僧行源解案と同じく、末山の記載がない。

この段階ですでに本山と呼ばれるグループと中山グループは成立していたことは確実であるが、まだ、末山は成立していなかったかもしれない。しかし、先に述べたように、すでに「六郷」の名前は、大治5年(1130)の経筒や保延7年(1141)の銅板法華経の箱板の銘文にあり、関東東部の六郷を範囲とした寺の組織化は進んでおり、末山分の寺が存在しなかったというより、この段階では、未だ末山は独立した一山をなしていなかったとみるべきであろう。いずれにしても、六郷山の三山の形式は12世紀の半ばには整備が進み、六郷山全体では、すでに580人もの僧侶が存在し、一寺院でも保元2年(1157)段階の夷石屋では、院主と思われる僧侶と22人の住僧が生活しており(保元2年12月29日の僧常智解案、「余瀬文書」)、巨大な寺院集団に発展していたのである。

仁安3年(1168)の目録自体は信頼できないが、なぜ、後世にこのような目録を作成する際に、仁安3年という年を選んだのであろうか。12世紀前半における六郷山寺院の整備の過程を考えると、その完成時期がこの時期であったと推定しても違和感はないと思われる。

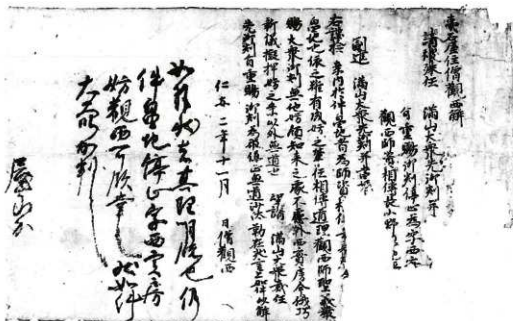
それでは、このような12世紀の三山はどのように寺院として組織されていたのであろうか。鎌倉時代以降の六郷山は、六郷山執行によって統轄されていたが(この点は後で詳しく述べる)、12世紀の初期天台六郷山は、長承4年(1135)の僧行源解案に見られるように、六郷山の満山大衆の総意によって山内の重要事項を決定していたようである(「余瀬文書」)。しかし、執行は設置されていなくとも、組織の中心をなす寺院は存在した。それが「惣山」と推定される。惣山は安貞2年(1228)の目録に見られるもので、この目録では、屋山寺を「惣山」とする。惣山とは六郷の寺々を統べるという意味と考えられる。惣山が12世紀に存在したという文書はないが、12世紀に焦点を当てると、屋山寺は、いわゆる「惣山」にふさわしい存在であったことはさまざまな史料から明らかにできる。

まず、太郎天とよばれる重形神像の存在である。その胎内に大治5年(1130)の年号が墨書され、この像の造立の主導者である天台僧門尋・豊前講師覚成房などとともに宇佐宮の御前検校やその妻、屋山僧とおもわれる経舜など多くの結縁者の名前が記されている。像の名はその墨書からすると「屋山太郎惣大行事」であり、叡山の大行事社との関係を想定させ、惣山にふさわしい神像といえる。ただ、「惣大行事」は、屋山だけのものではなく、元文2年(1737)の記録には両子寺の権現堂の中に、千手観音・薬師十二神の本尊と不動・毘沙門・日光・月光の脇立のほか「惣大行事三尊」の記載が見られたり(「六郷満山関係文化財総合調査概要」(二))、千燈寺の岩屋には太郎天岩屋があり、天狗姿の石仏があることから、「惣大行事」の存在が直ちに惣山につながるということは短絡である。

しかし、保延7年(1144)に屋山に埋められた銅板法華経の存在を併せて考えると、中心寺院としての惣山にふさわしい遺物といえる。すなわち、長安寺に残る銅板法華経とそれを納めた経函は、宇佐宮の御馬所検校である紀重永によって作成されたということが銘文に記されているが、紀重永作の銅板法華経は、求菩提山と彦山にも同一形式のものが存在する。これらは、経塚に埋められたものであり、宇佐宮にかかわる天台修験の拠点に埋納された点が注目される。現在、現

物が残っているのは、屋山と求菩提山の二つであるが、六郷山の分が屋山に埋められたことは屋山の六郷山における位置を明確に示していると考えなければならない。

また、『六郷山年代記』では、長承元年（1132）の牛死の祈祷では本山と屋山にある大般若経で転読がなされた。これは屋山の重要性を示しているし、仁安2年（1167）11月日の夷石屋住僧観西解では、大衆の判の部分に「屋山房」の記載がある（『余瀨文書』）。これを県史料の編者は「尾継口ヨリ關」として第二紙にまだ記載があったように理解している。確かに第二紙があった可能性は否定できないが、「屋山房」が大衆の名で安堵を行った可能性も否定できない。断定はできないが、屋山が惣山として大衆を代表する立場にあったとすれば、このような様式もあり得たかもしれない。



第6図 仁安2年11月日付 夷石屋住僧観西解（『余瀨文書』）

さらに、12世紀後半に入ると、屋山はその中心寺院にふさわしい伽藍整備が進められたようである。久安6年（1150）には、屋山では、龍頭を含めて5尺3寸（約160cm）、銅5300両の大梵鐘が経輝（太郎天の胎内銘にも見える）・永賢らの勧進によって鑄造されたが、久寿3年（1155）には、2500両の銅を加えて改鑄され、さらに大きな梵鐘が作られている（『六郷山年代記』）。まさに惣山の名にふさわしい鐘であった。

しかし、このような惣山屋山寺も緒方惟栄の乱入によって大被害を受ける。寿永2年（1183）に寺は放火され、焼失し、この年から建久4年（1193）まで12年間退転したという（『六郷山年代記』）。

(4) 六郷山の再編—執行の成立と関東祈祷所六郷山

徳山屋山寺の退転によって、混乱した六郷山の支配組織は、応仁の屋山入山によって再建が計られる。『六郷山年代記』では、建久5年(1194)に応仁が屋山に住み、建久7年(1196)には、豊後に下向していた大友義(能)直の支援を受けて権現社ほか七堂の再建が行われたとある。応仁が再興を完成し院主職を退いた寛元2年(1244)に作成されたとみられる応仁置文案によれば、権現堂・講堂・持仏堂などの建物とそれに付く、荘殿類が記され、堂や寺で行われるさまざまな祭・法会の免田が書き上げられている(「道脇寺文書」、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要VI、飯沼賢司「豊後国六郷山「道脇寺文書」の紹介」)。ここに記されたのが、応仁の再興の集大成である。



第7図 屋山院主僧応仁置文案(「道脇寺文書」)

屋山の長安寺に伝来する「長安寺歴代過去帳」の「六郷宗山屋山佛持院八代分 此分六郷山執行職是也」の初代として応仁があげられ、「この代より宗山執行寺」とあり、応仁を「大内之産」(京都生まれ)とする。一方、応仁は、『大神姓都甲氏系図』(都甲惟孝氏所蔵)によれば、都甲家実の子息で、惟家の兄弟となっている。惟家ももともと養子であり、応仁も実子は明らかでないが、応仁が屋山の所在する都甲荘の地頭の系譜に連なる人物であることを注目する必要がある。系図を頭から信頼することはできないが、現在発見されている応仁を祖とする系図4本がすべてが都甲氏のものであることから考えて、都甲家実の子息とすることに不審な点はなく、「大内之産」とする説は認め難い。



第8図 「大神姓都甲系図」(都甲惟孝氏所蔵)

『長安寺歴代過去帳』では、応仁を初代六郷山執行とするが、『六郷山年代記』では、応仁を初代執行とする記載は見えない。応仁の段階では、まだ執行職というものがないのが成立していなかったのではなかろうか。しかし、応仁は「惣山」屋山寺の院主であり、執行の職は成立していなくても、執行が成立するまでは、實質的に六郷山を総帥する役割を担う可能性ももっていた。

それでは、本当の初代の執行の地位に就いたのは誰であろうか。『六郷山年代記』元久2年(1205)条に記される「六郷惣山執行円豪門徒相伝申也」の記事に注目する必要がある。現在、確認できる確実な六郷山執行はこの円豪が最初である。この記事は、円豪の弟子に執行を相伝させるというもので、執行就任に関係するものではないだろうか。網野善彦氏によって紹介された島原松平文庫所蔵の「白坂東御教書之写」と表題された文書には、安貞2年(1228)を中心に執行円豪に関する文書が所収されており、13世紀の初期に活躍した人物であることが明らかである。この時期は、応仁が屋山寺院主として寺の再建をしている時期に当たり、惣山屋山院主と六郷惣山執行の関係はどのようになっていたのだろうか。

円豪は、『長安寺歴代過去帳』には屋山の院主として見えず、「白坂東御教書之写」によれば、執行として両子寺院主職を所持していた。とすれば、13世紀の初頭、六郷惣山執行に就いた円豪と惣山院主である応仁の間には微妙な緊張関係があったかもしれない。円豪の出自は明らかでないが、延暦寺側から送り込まれたか、その意向を強く受ける人物でなかったのだろうか。

この時期、惣山の実力者として君臨したのは、九条兼実の弟慈円であった。慈円は、青蓮院門跡として建久3年から建保3年までの間に四回にわたって天台座主に就任している(『天台座主記』)。彼は、無動寺を所持し、その譲状には、「六郷山」の名が見えている(建暦3年2月日付前大僧正慈鎮譲状案、『鎌倉遺文』1974)。円豪の六郷山執行に就いたと推定される13世紀初頭は、慈円の力が六郷山に及んだ時期であることに注目すべきである。この時期、摂関家では、近衛流と九条流の二家が対立して、九条家は源頼朝と結び、慈円は天台座主として兄九条兼実を支えた。宇佐宮は、摂関家を本家と仰ぐが、この時期、嫡流の近衛家が本家であり、宇佐宮の影

響をも受ける六郷山には、この近衛と九条の二流の対立が微妙な影を落としていたと思われる。

六郷山の支配者であった慈円は、近衛家すなわち宇佐宮や弥勒寺の影響力を排除し、支配体制の再編を目指したのではなからうか。円豪の登場はちょうどそのような時期に当たっているのである。

安貞2年(1228)5月日の六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録は、その最初に「注進 豊後国六郷満山谷々別院雲寺齋佛事神事等將軍家御祈禱卷数日録事」と記され、最後には、將軍家の円満、異国降伏、聖朝安穩、大施主の相模守平朝臣(北条泰時)の息災延命・寿命長遠を祈ると記され、この目録が將軍家に注進された祈禱の巻子目録であることは明らかである。安貞2年(1228)8月16日の関東御教書によれば、源太子代官包(兼)直法師および宇佐宮の神官永永重重が六郷山執行円豪と両子寺の院主職をめぐって対立しており(島原松平文庫所蔵「自坂東御教書之写」、『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』VI、網野善彦「豊後国六郷山に関する新史料」)、その最中に安貞2年5月の目録は作成された。この目録作成の主体となった執行兼権別当以下の所司僧は、中野幡能氏のように天台無動寺の僧だという説もあるが(『八幡神印史の研究』増訂版)、六郷山の僧であることは明らかである。

まず、祈禱のための目録の注進主体が本山無動寺とすれば、その注進先が六郷山衆徒であるという形式の文書は不可解である。また、無動寺には、「執行兼権別当」など職が置かれた形跡はない。したがって、注進主体は六郷山の所司であると考えらるべきである。とすれば、「執行兼権別当」は円豪と推定される。ここから、宇佐宮との対立から幕府へ接近するという円豪の姿が見えてくるし、また、九条家方の慈円の支配を受ける六郷山が幕府に結びつくのは当然であった。

網野氏が指摘するように、安貞2年(1228)10月18日の関東御教書は、祈禱を勤行したとの執行の報告に対する返事であり、安貞2年5月の六郷山目録を注進したことに対する返事だと考えられる。同年12月8日の関東御教書は、「関東祈禱所として卷数を捧げるの上は、向後諸方妨げなく、執行に安堵せしむべし」と、六郷山が関東祈禱所であることを確認し、執行領を安堵している。網野氏はここに正式に六郷山は関東祈禱所として認められたとする(網野善彦「豊後国六郷山に関する新史料」『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』VI)。筆者もこの見解に同感であり、幕府への接近によって関東祈禱所になる過程で、六郷山に執行と呼ばれる職が成立したと考えるのである。

円豪は、慈円や鎌倉幕府との結び付きによって六郷山の再編を行った。否、むしろ延暦寺の実力者慈円などの積極的な介入があったかもしれない。このような過程で六郷山執行とよばれる職が登場したと考えるべきであろう。安貞2年(1228)5月の六郷山目録では屋山寺を惣山としているが、すでにこの段階では屋山という寺を中核とする惣山支配体制は崩れ、形骸化していたであろう。

それでは、惣山屋山の体制から六郷山執行体制への移行はいかになされたのであろうか。12世紀の半ばから後半の六郷山においては、基本的に満山大衆が山内の支配の頂点にあり、惣山が支配するというより、大衆体制の全体の調整役のような機能を果たしていたようである。



第9図 「余瀬文書」

12世紀の山内の開発・住僧の所願安堵などは満山大衆の衆議によって決せられた。図9の文書にあるように、開発の許可や安堵を受けたい者は、満山大衆の議を申請しての外願を受けた（「余瀬文書」）。このような満山衆議の体制は、惣山を中心としながらも、大衆という満山住僧が主体とした体制であり、本山である延暦寺の上からの支配は、体制化されていなかった。

ところが、緒方惟栄の惣山屋山寺焼き打ちと鎌倉幕府の成立は、大衆支配の体制に変化をもたらした。大衆の連判は、鎌倉中期まで議状などにみられるが、次第に形骸化してタテ系列の支配が強まる。

下 源實所

可令免故禪正房屋敷公事□

右、於件所ハ、至丁後得來、於公事者、令免行之状如件、

建久八年十一月十日

使者僧（花押）「千祐房」

先達大法師（花押）「常敬房」

先達大法師（花押）

先達大法師（花押）「親行房」

鎌倉初期の六郷山の山内の安堵などに関する文書に注目すると、まず、建久8年（1197）11月10日の使者千祐房等連署下文は、使者僧侶と六郷山大衆の代表と思われる僧侶が連署して源実

対して、故禪正房屋敷の公事を免除している（「余瀨文書」）。ここに見える使者僧は、同じ「余瀨文書」の建保3年（1215）4月19日の本主御使僧範実下作職充文や承久3年（1221）10月日御使藤原某下作職充文など、鎌倉時代の初期に見られる「御使」に共通するもので、無動寺なり延暦寺から派遣された、代官的な僧侶と考えられる。史料が少ないので、確かなことはいえないが、建久8年（1197）11月2日の使者千祐房等連署下文は、中央派遣の使者と大衆の連署という過渡的な文書形式とみなすべきであろう。

次に、元久3年（1206）4月26日には、「御下知」（無動寺別当の下知か）を受けて、長小野の安養房の山岳を僧朝範に安堵した惣公文所大法師安堵状が出されている（「余瀨文書」）。惣公文所上座大法師ついて、中野幡能氏は、六郷山の三綱ではなく、無動寺政所所司でなかったろうかとしているが、筆者は、これを六郷山の三綱と考える。すなわち、安貞2年（1128）5月の六郷山日録に記された「上座」「都維那」「寺主」の三綱の存在について、中野氏はこれを無動寺の所司と解釈しているため、そのような結論が導かれた。確かに、充所が六郷山山徒中になっており、外部の文書のようにも思われるが、先に述べたごとく、無動寺所司でないことは明らかであり、日録であると同時に置文的性格を有していたと考えらべきであろう。したがって、この史料は、六郷山において、三綱による寺務体制がこの段階で成立していたことを示していることになる。

また、元徳2年（1330）4月10日の鎮西下知状に引用された承元2年（1208）の右大臣家御下知にも六郷山所司の申状が存在したことが見える（鳥原松平文庫所蔵「自坂東御教書之写」）。六郷山所司は、三綱を含む寺務と推測され、13世紀初頭には、三綱を含む所司の組織が確立していたことがわかる。

安貞2年（1128）5月の六郷山日録では、この三綱のほかに「執行兼権別当」を含む3人の権別当が六郷山の所司として見えるが、これらの執行一権別当の体制も三綱との関係で成立したのであろう。鎌倉時代の初頭、六郷山は、天台無動寺の別当の下に全体すなわち満山を統括する執行職が置かれ、本山・中山・末山の三山それぞれには対応して補佐役である権別当が置かれたと考えられる。権別当とは、六郷山の直接の支配者である無動寺の別当に対する「権別当」職であったとみられ、嘉暦2年（1327）6月17日の権別当仁王丸下知状案のごとく（「余瀨文書」）、担当の山に対する一定の支配権利を所持しており、六郷山の三山はそれぞれ直接本山無動寺と結び付いていた。六郷山の支配秩序は、六郷山の三山の一山ごとのレベルと六郷全体にわたる惣山のレベルがあった。それ故、「執行兼権別当」という兼帯のかたちがあったのであろう。

『六郷山年代記』では、元久2年（1205）に「円豪の門徒が六郷惣山執行職を相伝する」という記載があるが、この記事は、これまでの状況からみて、六郷山執行の成立を示す記事であると考えるとまちがいない。また、六郷山所司の成立も、その初見のころであることからみて、執行一権別当体制と不可分な関係であったとみてよいだろう。おそらく、先に推定した慈円などの中央の勢力による六郷山の再編に対応しこのような執行一権別当一上座・都維那寺主支配体制ができあがったのだと考えられるのである。ここに中世の六郷山の組織は完成をみるのである。

第四章 六郷山寺院の考古学的調査

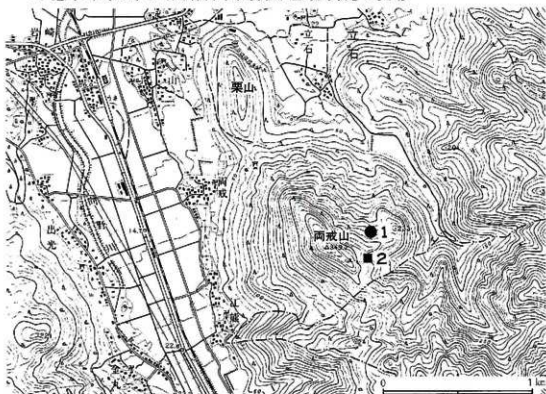
I. 後山石屋（後山金剛寺）

(1) 位置と環境

日豊本線の宇佐駅の南東部には、丸っこい山頂部を持つ標高349 mの両戒山〔大門（デーモン）〕山があり、北へ延びる派生丘陵は神奈備山の栗山である。両戒山の山麓には、栗山を挟んで立石と両戒の村落がある。これ等の位置から見て、両戒山の南東部は後山にあたる。宇佐市大字立石に位置する本山本寺の後山金剛寺は、両戒山の南東尾根筋の標高約250 m前後の北側斜面（通称デーモンピラ）を中心とした緩い谷部に展開している。また、両戒の村落付近には本山本寺の一つである吉水（山嵐龜）寺も位置している。

後山金剛寺の遺構を記録の上でみると、

1. 安貞2年（1228）の『六郷山諸勳行並諸堂役祭等日録』には後山石屋とあり、本尊は薬師如来である。また、六所権現御賣前では二季御祭・五節供、権現御賣前では仁王講一座・勝王講一座が行われている。
2. 『六郷山年代記』には建保3年（1215）に講堂が焼け、建長6年（1254）には講堂の供養が記録されている。
3. 弘安7年（1284）の『六郷山異國降伏祈祷巻数日録寫』には後山。
4. 建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に後山。



第10図 1. 後山金剛寺 2. 後山石屋（後山金剛寺の現業師堂）

5. 室町時代の『六郷山定額院主目録』に後山金照寺院主薬王院徒呂三十六坊。
6. 後世の作といわれる仁安3年(1168)の『仁安3年六郷二十八山木寺目録』に後山金剛寺とある。
7. 江戸末期の『太宰管内志』には「金剛寺今は絶て山の中ほどの岩洞に薬師堂のみ残り堂は南向なり今は山伏寶光坊というもの立石村の内に住て薬師堂をまもる昔の堂舎ありし處は薬師堂の上なりといふ」と記されている。

(2) 遺構の状況

今回の調査の主な目的は、漠然としていた後山石屋(後山金剛寺)の位置を把握し、寺域と伽藍配置を大まかに図化し、今後の研究の基礎資料を得ることであった。第20図は後山石屋(後山金剛寺)の平板実測図である。

薬師堂

現在、後山金剛寺の薬師堂と呼ばれている岩陰(後山石屋)には、戦国～江戸の初め頃の薬師が向かって右端に丸彫りされており、細々とした信仰の対象となっている。石屋の下部は、近世に竈として幅約6m、奥行き約1m程度掘り広げられ、十二神将の石像が一列に安置されている。石屋は南向きであり、上部に覆い屋の痕跡を刻んでいる。石屋の東隅には二基の宝篋印塔があり、石屋の前は近世～近代の瓦が散乱する約200㎡の平坦地が形成され、東側は石垣で補強されている。薬師堂の平坦地の南にも約60m程度の平場がある。また、石屋の6m東にも小さな自然洞窟があり、近年まで清水が出ていたという。

板碑群

薬師堂の石屋の北東20mの崖縁にも間口約6m、奥行き約2mの自然の岩陰があり、板碑が15基一列に安置されている。板碑は小型であり室町後期に比定できる。



第11図 後山金剛寺の遠景(矢印部分)と両戒山(右)

第12図
後山金剛寺の薬師堂



第13図
薬師堂の東側にある宝篋
印塔



第14図
薬師堂東側の板碑群



経塚遺構群

板碑群より10m程度坂を登と、両戒山から派生した尾根状の端部に着く。この部分は標高約230m程度であり、巨岩が幾つも折り重なり、岩肌が露出した小さな山頂部を形成している。経塚遺構群は山頂部のやや北側の、西から東へと傾斜した斜面部に構築されている。その範囲は東西約60m、南北約10mに及ぶものと推察できる。この一帯には偏平な角礫が多数散乱しており、かなり以前に盗掘を受けていることは明白である。一昨年台風による風倒木の被害もあるが、経塚の石室の撥ね上げられた付近にも経筒の破片等はほとんど無く、盗掘が徹底的に行われたことを暗示している。

現在、表面の観察によって確認できる経塚の石室は4基である。これを仮に1号石室～4号石室と仮称すると、1号～3号の石室は偏平な板石を4枚使用して、約30cm四角の石室を構築している。4号石室は風倒木の根元に位置し、石室には蓋石が遺存していた。この付近から陶製経筒の破片を数点採集している。(第19、26図1、2)



第15図
経塚遺構群の近景
(東側より)



第16図
経塚の石室遺構

第17図
経塚の石室遺構



第18図
経塚の石室遺構



第19図
経塚の石室遺構



人為的な平坦面の遺構

第1平坦面

経塚遺構群の東端から約20m程北へ下った地点には、斜面部を半月形に削って平坦面を造った平場がある。面積は約300㎡もあるうか。風倒木が折り重なり全体を把握できないが、何らかの建物跡を想定するのに十分な広さを持つ。

第2・第3平坦面

第1平坦面の東には低い谷状部があり、ここが小道となっており2～3の石段が残っている。これを約30～40m程下がると、東側に段になって狭い二つの人為的な平坦面が造り出されている。いずれも斜面部を小さな半月状に削平して、50～60㎡の平場を形成したものである。何方も南西側にやや小高い入り口部のような構造を設けた部分があり、共通点が指摘できる。下段の第3平坦面には、径約70～80cmの国東塔の筒身が一基破損状態で転がっていた。国東塔の南側のやや小高い所には、一辺が約50cm前後の方形の台石が4枚「田」の字に配置されており、国東塔の基壇を構成していた様子である。

第4平坦面

第3平坦面のすぐ下は、しっかりした造行われた遺構跡である。斜面を直線的に削り出して、長さ約60m、幅約15m、面積約900㎡の平坦面を形成している。平坦面の中央やや西には、建物の基壇か、あるいはそれを取り囲む状態で「コ」の字状に土堤が巡っている。土堤の幅は約3～4mで、高さは20～30cmである。土堤の一辺は約10m前後であり、本米、雨水等の浸入防止のために方形に構築されていたものであろう。明確な建物遺構はこれだけである。

第5平坦面

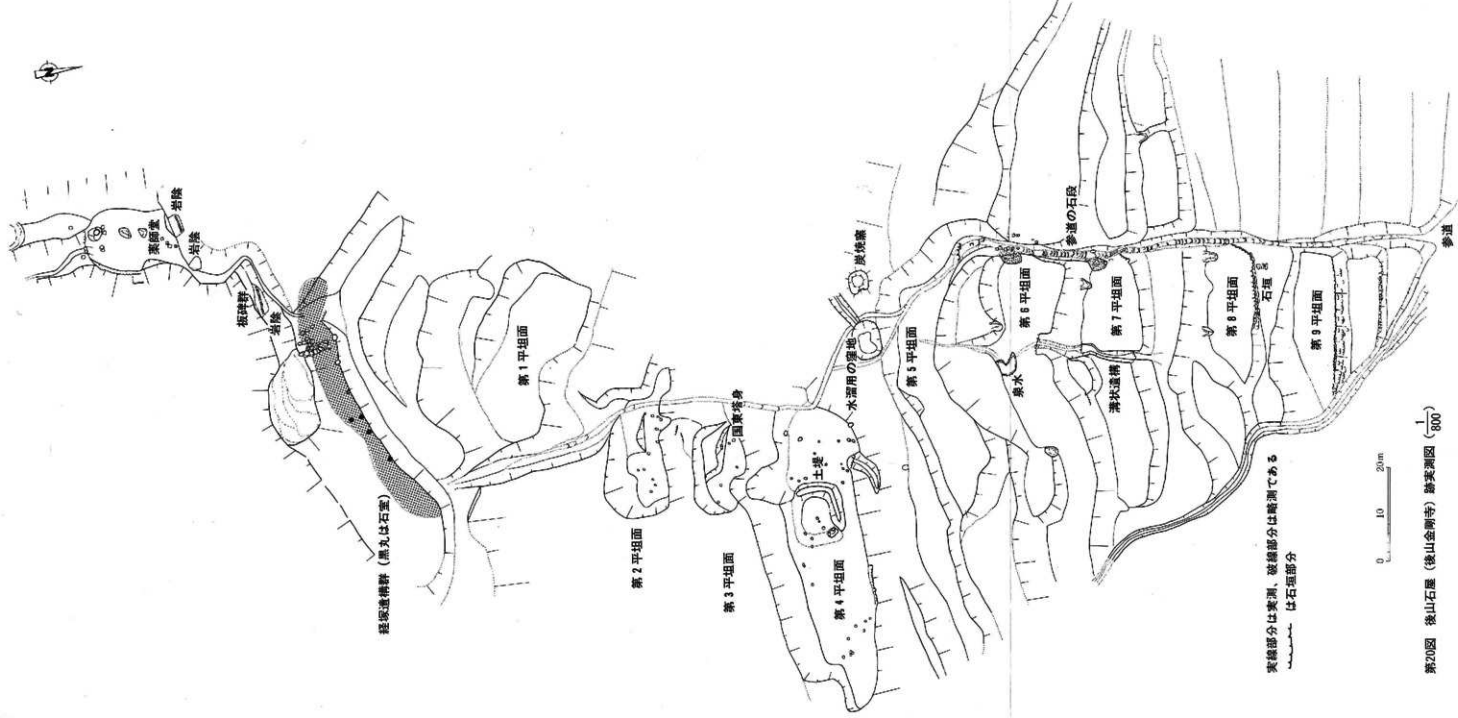
第4平坦面の斜面を約20m下った北東部に、面積約400㎡の弓なりの平坦部がある。この平場に接する南には、底径3～4mの水溜用の窪地がある。清水の湧く場所かもしれない。また、この西には時期不明の炭焼き窯がある。

第6平坦面

5平坦面の北西隅の浅い谷間に在る、壊れた自然礫の石段を約20m下ると、比較的残りの良い大きな石段が部分的に遺存している。この直線的に延びる参道の左右には坊跡と推察される多数の平坦面が階段状に形成されている。6平坦面は緩い弓なり状を呈し、長さ約40m、幅約12m程度で、面積は約500㎡前後である。平場の中央の南隅には三日月状の小さな泉水跡が遺存しており、坊跡の可能性は高い。また、南西隅の参道に接した所には自然の小石を意図的に集積した場所がある。流れ落ちる雨水等を防ぐためであろうか。6平坦面の南西側と東側には、斜面部に小さな平場を造っている。

第7平坦面

7平坦面は面積約480㎡であり、中央部を流れる溝状遺構で二分されている。溝状遺構内には2～3箇所に石を並べた形跡があり、水溜めの部分を設けている様子である。この溝内を中心に第29図の遺物が採集された。7平坦面の中程の南斜面には狭い平場がある。また、7平坦面の西



第20図 後山石室 (後山金剛寺) 跡地断面 (500)

第21図
第3平坦面の国東塔身



第22図
坊跡状遺構に部分的に
積まれた石垣



第23図
第4平坦面の土堤遺構





第24図
第7平坦面の泉水



第25図
第6平坦面の小石を
集積した遺構



第26図
第7平坦面中央の溝状遺構

端、参道に接する部分には入口状の石段があり、南西隅には6平坦面と同じ小石の集積場所がある。坊跡の可能性は高い。

第8・第9平坦面

第8・第9平坦面は、いずれも北側の一部を石垣で築いたものである。8平坦面の石垣は大きな偏角礫を横積みし、頑丈に仕上げている。この面より石鍋の破片が表露されている。面積は西側で約200㎡であり、やや高い東側で約100㎡を測る。9平坦面の面積は250㎡前後である。

以上のように、やや特徴のある平坦面を瞥見したが、その他にも参道の東側には二面、参道の西側には十数面の平坦面が遺存しているが、これ等は妨かそれに関係する何らかの遺構面であることは間違いない。

また、今回は図示できなかつたが、経塚遺構群から西の斜面を約100m程登った頂上には巨岩が累々と重なる所があり、石體権現と呼ばれている。その近くの頂上平坦部には自然礫を「L」字状に並べた建物の基段の一部が遺存していた。村の古老は、この遺構やその一帯を権現様と呼んでいる。この権現様には極めて興味深い話が伝わっている。長洲の岡部保夫氏（大正12年生まれ）や江熊の江熊公德氏（明治36年生まれ）等の話によると、最初は海を見下ろす北向きの山頂平坦地に権現様が祭られていたが、長洲の沖の海を航行する船に災難が振りかかるため、権現様を海の見えない両戒の立道まで下ろし、海と反対の南向きに祭ったという伝承である。このことは、関東祈祷所である六郷山寺院において、異国降伏の祈祷が、権現様の前で国家的な事業として行われていたことを、端的に示す例として注目できる。

さて、ここで問題となるのは、上述した中世の記録にみえる建物の位置が、この実測図のどこに比定できるかという点である。記録には後山石屋・権現・六所権現・講堂がある。

後山石屋は薬師堂の石屋を意味し、権現は上述した山頂平坦部の伝承地を一応想定しておく。問題は六所権現と講堂の位置である。平面図をみると、北から南へ直線的に延びる参道の両側には階段状の坊跡と推察される平坦面があり、その最上部の第6平坦面には泉水を設けた坊跡がある。仮にこれを院主坊と仮定しておく。坊跡群を過ぎると、参道はやや東へ曲がって、湧水の溜池を過ぎ、後山金剛寺の中で最大の面積である第4平坦面へ辿り着く。4平坦面は土堤を巡らした建物施設があり、講堂跡の可能性が高い。この南側の段上の第3平坦面には国東塔が立っていた痕跡がある。次に、六所権現の位置であるが、講堂と経塚群との間にある第1平坦面がこれを祭るに相応しい場所である。

以上のように、後山金剛寺の平面実測図から伽藍配置と建物跡の想定を試みたが、ここで留意すべきは、寺院構造の最奥部に位置する六所権現や薬師堂、あるいは他の六郷山寺院において奥の院と総称されるものと、経塚遺構群との相対的な位置の関係である。六所権現の位置が第1平坦面であるとすると、すぐ上方の小高い山の斜面部が経塚遺構群であり、六所権現はあたかも経塚を意識した礼拝施設や祭壇施設であるかの様相を呈している。同じ様なあり方をする遺跡としては、六郷山寺院の辻小野西明寺、長安寺、旧千燈寺、横城山東光寺、富貴寺、津波戸山水月寺等を掲げることができる。



第27図
第8平坦面の石垣



第28図
参道の石段

(3) 表面採集遺物

後山金剛寺の経塚遺構群と第7平坦面中央部の溝状遺構内、及びその周辺部から下記する遺物が表面採集されている。

1・2は経塚遺構群で発見された陶製経筒の破片である。1は4号石室の周辺で採集されたものであり、台風による風倒木で石室が破壊されている。破片は3片であり、各々接合しないが同一個体の四耳壺である。復元すると、高さ約30cm、胴部の最大径は12.3cmを測る。やや窄まる口縁部下は瘤状に盛り上がり、すぐ下には縦に把手が着く。底部は揚げ底であり、同部下半の表裏面は段を持って波打つ。色調は小豆色を呈するが、表面には薄黄緑色の釉が施されている。2は底径約9cmの上げ底の底部である。

3～32の内、13、29、32を除いた全ては第7平坦面中央部の溝状遺構内から出土した遺物である。溝状遺構は幅約1m、深さ約30cm程度の自然的な雨水の流路であり、礫が満たしている。こ

の流路の所々には腰を石垣状に組んだ部分があり、小さな水溜めを形成している様子である。

3・4は高台の付いた土師器の坏底部である。3の高台は7mmの高さで、径は7.6cm。8の高台は1.8cmの高さで、径は9cmを測る。

5～10は土師器の坏である。5は口径15.2cm、器高は3.2cm、底径は9cmを測る略完形品である。底部は回転糸切り底であり、隅部に文字の様な線刻があるが判読はできない。6は口径13.6cm、器高は2.8cm、底径は8.8cmである。7は口径12.6cm、器高は2.2cm、底径は10.6cmである。8は口径11.2cm、器高は2.2cm、底径は8.6cmである。9・10は底部である。9の底には簾状の正痕が付着している。

11～17は土師器の小皿である。口縁部に微妙な変化があり、三角形に尖った特徴的なものもある。口径は6.6～8.6cmで器高0.8～1.4cm内に収まる。

18は土師器の碗である。口径は15.4cmである。

19・20は瓦器碗である。19は口径14cm、20は口径15cmである。表裏は撫ぜ調整されている。

21～23は素焼きの土器である。21は口縁部が肥厚した土鍋。22は内側に刷毛目痕を残す片口。23は中空の把手がついている。

24は口径28cmの東藩焼きのコネ鉢である。肥厚した口縁部には軸がかかる。

25～27は須恵質の土器である。表面に格子目の叩き痕を残している。

28・29は白磁である。28は碗の口縁部である。

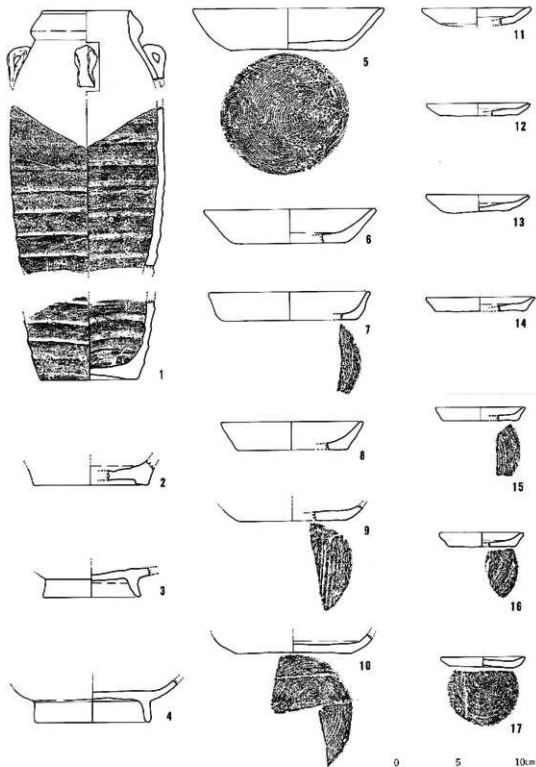
30・31は龍泉窯系の青磁の底部である。30の見込み部には草花文を施す。31の底部にはスタンブがある。「金玉満堂」の一部の可能性もあるが断定はできない。

32は滑石製の石鍋の口縁部である。

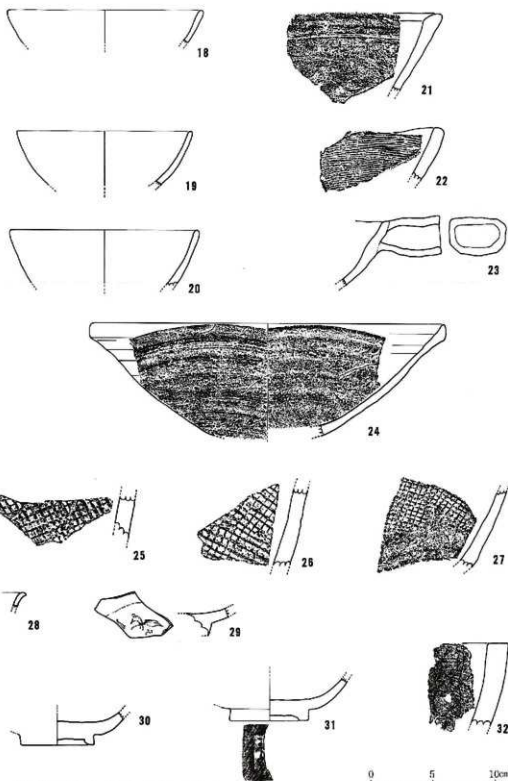
以上の様に、経塚遺構群から出土した2点を除いて、その大部分は坊跡と推定出来る第7平坦面の溝状遺構で発見されたものであった。これ等は伴伴の一括資料ではないため、個々の断片資料で時期決定のメルクマールになりそうな要素を取り上げて、それを総合しておよその時代を推考してみる。

まず、経塚遺構群から出土した1・2の経筒は12世紀代に比定できそうである。県内出土の経筒の内、銘文入りの経筒では、その約78パーセントが12世紀前半代の所産である。12世紀代の遺物としては、3・4の高台付きの土師器の坏や口径の大きな5の坏等も含まれそうである。その他の土師器の坏や小皿は、口縁部が細く尖る特徴、口径や器高の比率から、13世紀～14世紀代に位置づけることができる。また、碗については、比較的整理された小倉正五氏の瓦器碗の編年^(註)から19・20は13世紀後半～14世紀前半に比定できる。これに、18の土師器の碗の残存や黒色土器が見られないことを考慮すると13世紀代というのが適当であろう。一方、輸入陶磁器からみると、白磁の碗の外反した口縁部の特徴、龍泉窯系の青磁の底部の特徴、龍泉窯系の鎊蓮弁文が認められないことを消極的な要素に加えてみると、これ等は13世紀代に比定できそうである。

個々の遺物は、表面採集の資料のため、数も少なく積極的な断定資料に欠けるが、これを総体として捉えた場合、後山金剛寺の考古資料は、12世紀～14世紀頃までの間に位置づけることが可



第29図 後山金剛寺表面採集の遺物 (1/3)



第30図 後山金剛寺表面採集の遺物 (1/3)

0 5 10cm



第31図 後山金剛寺遺跡出土遺物写真

能であろう。つまり、経塚遺構群は12世紀代、坊跡は13世紀を主体とした、12世紀～14世紀代に及ぶものと推察しておく。

上述した文献資料のみたように、安貞2年(1228)の目録に後山石屋、六所権現、権現。建保3年(1215)に講堂焼失。建長6年(1254)に講堂供養。弘安7年(1284)に後山。建武4年(1337)に後山。室町時代に後山金剛寺院主薬王院徒呂三十六坊とあり、記録としては、13世紀前半～14世紀前半におさまる。そして、建保3年(1215)の講堂焼失を考慮すると、当然12世紀代まで遡る可能性は大きい。つまり、文献資料と考古資料とのギャップは殆どないといえそうである。

(注) 小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について—形式・編年に関する試案—」『古文化談義』第14集

II 津波戸石屋（津波戸山水月寺）

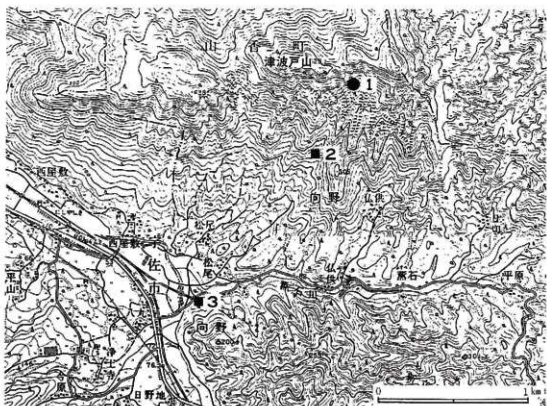
(1) 位置と環境

津波戸山は山香町大字向野に位置し、標高529mを呈する岩山である。この一帯は峻峻な岩肌を露出した巨岩が屹立し、鋸の歯の様な山峰が連続している。

津波戸山頂へは、向野字小屋敷から津波戸山旧海蔵寺跡を経て、巨岩が転がる枯れ川の溪谷に入り、近代の八十八箇所巡りの石仏が点々と安置された、道なき道の谷筋を登り詰めると、津波戸山水月寺の奥の院と言われている小さな洞窟に辿り着く。山頂はそれから崖を這い登ること数分である。まさに、人間菩薩に象徴される様な、山岳の修験霊場に相応しい景観と立地環境である。津波戸関係の資料が文献上に現れるのは、

1. 安貞2年(1228)の『六郷山諸動行並諸堂役祭等目録』に津波戸石屋。
2. 建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文家』に津波戸山。
3. 室町時代の『六郷山定頼院主目録』に豆和波山良日寺。
4. 後世の作といわれる仁安3年(1168)の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に津波戸山水月寺とあるのみである。

津波戸山水月寺の前身は津波戸石屋であり、本尊は千手観世音菩薩であったことが判る。



第32図 1. 津波戸石屋(津波戸山水月寺奥ノ院) 2. 旧津波戸山海蔵寺 3. 向野麩女寺

(2) 遺構の状況

津波戸山水月寺関係の遺跡の発掘調査は、昭和39年に山香町向野で実施され、『豊後・向野廃寺調査報告』として刊行されている。遺構は二つの時期からなる寺院の石積み基段や礎石が発見され、軒丸・軒平瓦や土器、占銭等から、1次遺構を平安前期～中期、2次遺構を平安後期～鎌倉時代の寺に比定している。そして、この向野廃寺を水月寺のものにあてる妥当性を模索している。

津波戸山水月寺の位置は今回の調査でも明確に出来なかったが、これに関連した二、三の考古資料を収録することができた。ここでは、津波戸関係の遺構と遺物を瞥見してみる。

津波戸石屋（第34図）

古来、津波戸山水月寺の奥の院と呼ばれている所である。安貞2年（1228）の『六郷山諸動行並諸堂役祭等目録』に本山分「一津波戸石屋、本尊千手観世菩薩 深山去里数丁、昔有人開菩薩、行頭満山給也、彼菩薩於此石屋、放瑞相、告語當峯巡禮次第也、於能行聖人御石屋也、亦齊衡二年二月十五日、同聖人自筆仁書寫如法經時、為観水以筆軸、指白岩給、自軸跡霊水漲出事、于今新也、當代取此水、瀧山仁書寫如法經云々・」とある。

津波戸石屋は巨岩の絶壁に挟まれた狭隘な谷間の詰まりに位置している。最奥の谷幅は約14m程度であり、頂上に向かって右隅に洞窟がある。洞窟の平面の間口幅は約5.9m、奥行は約3.6m程の半円状の自然洞窟である。洞窟内には戦後の祠堂が残存しているが、現在は荒廃するにまかせている有り様である。洞窟前のテラスは狭く、間口幅に対して、長さ3～5mの前庭で谷に落



第34図 津波戸山（中央部）と津波戸石屋（矢印）の遠景

ちる。洞窟内の左隅には美味しい清水の湧出する部分があり、今もチョロチョロと岩肌から滴り落ちている。上述の安貞2年の日録に言う、齊衡2年（855）に修行聖人が如法經を書写したという「硯水」の伝承地である。

特に留意すべきは「告誦當峯巡禮次第也」と「當代取此水、満山仁書寫如法經云々」という部分である。つまり、かつて人間菩薩が津波戸石屋で峯巡禮の次第を語り、修行聖人が如法經を書写した「硯水」が当代の六郷満山の如法經書写に使われているという意味であろう。このことは、六郷山寺院の峯巡礼や如法經書写の発生が津波戸石屋であったことを意味しており、県内最古の永保3年（1083）銘の津波戸山水月寺出土の経筒は、この伝承の持っている意味合いを考古資料で補完したものと見えよう。

また、津波戸石屋に向かって右側の崖面をよじ登った所にも、小さな自然の岩陰があり、異形国東塔2基（第35図）と石祠、狛犬等が安置されている。異形国東塔の一つは総高142cmで相輪に水焔電車が付く。桃山時代末～江戸時代初期に推定。もう一つは総高93cmで相輪を欠き、四角の塔身を持つ異形国東塔である。南北町時代末～室町時代前期に推定されている⁹¹。一方、津波戸石屋より数十メートル下った谷間には、石垣を巡らせた坊跡（第36図）がある。谷間の低い部分には4～5段の石が積み、**「コ」**の字状の石垣で整地されており、坊が築ける平坦面を形成している。石垣正面の長さは約7mを測る。敷地の面積は約70～80㎡である。坊の隅部には、長径約2.1m、短径約1.8mの楕円状の石組の窪みがあり、炭焼き窯の跡と推測される。これ等の遺構は時期のきめようが無いが、津波戸山に関する何らかの遺構であることは推察される。しかし、坊跡の両側は巨岩の絶壁が迫り、大雨の時には、谷の上流から流水の押し寄せそうな立地である。この場所に本山本寺の津波戸山水月寺を想定するのは無理であろう。

ところで、『叢書善鳴録五巻』には「釋能行姓字佐豊州人也云々、天長初住遠見郡津波戸山院、此有石窟、仁聞大士嘗高法華之靈區也、行久慕仁聞道業及四七聖蹟、未得明驗、遂入石窟・・」とある。天長年間（824～834）に釋能行が石窟の側にある「津波戸山院」に住み、「仁聞道業及四七聖蹟」を慕うが、「明驗」が得られないため、すぐ側の「石窟」に移って修業したことが記されている。つまり、先の谷間の小さな坊跡をこの津波戸山院に当てて考える事は出来ないであろうか。津波戸山院が、いつ頃の、どういう機能のものかは判らないが、津波戸山水月寺の奥の院とその周辺に当たる何かである可能性は高いのである。

（注1） 入江英親『国東半島の石造美術』『六郷満山関係文化財総合調査概要（三）』大分県文化財調査報告第六十二輯 昭和57年

津波戸山旧海蔵寺跡

津波戸山海蔵寺は向野松尾地区にある曹洞宗の禪宗寺院である。現在、津波戸山水月寺の奥の院にあった千手観世音菩薩と伝えられる仏像が安置されている。当仏像の作風は室町時代以前には通り得ないものであるが、津波戸石屋に相伝された本尊を踏襲する可能性は高い。海蔵寺の開基寺伝では、享保2年（1717）、立石の長流寺六世門山高照和尚が水月寺の廃滅を嘆き、本尊の千手観音像を海蔵寺に遷座したところ、日出藩主木下公の畏敬をえて、寺領を寄進されたという。



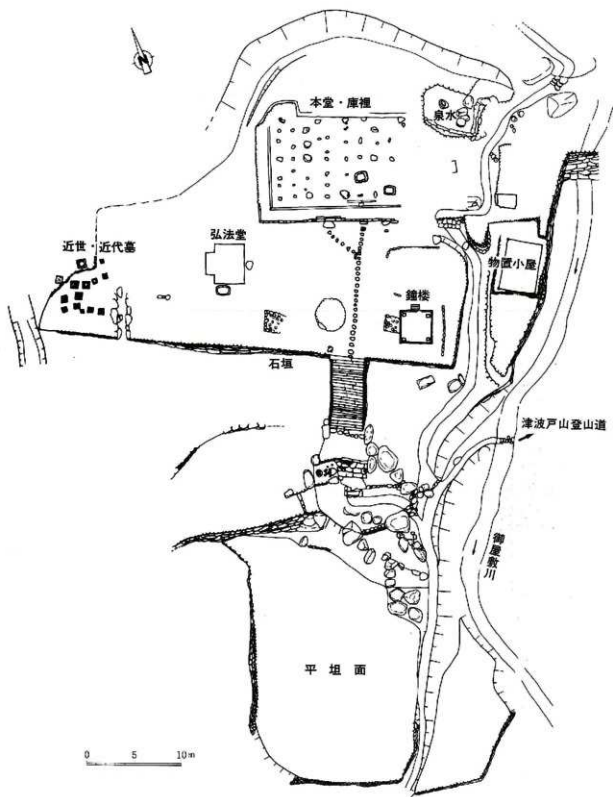
第34図
津波戸石屋と硯水（左端）



第35図
津波戸石屋周辺の石造品



第36図
石垣を巡らせた坊跡



第37図 津波戸山旧海蔵寺跡実測図 (1/400)



第38図
津波戸山旧海蔵寺の石段



第39図
津波戸山旧海蔵寺本堂跡

この津波戸山旧海蔵寺跡は津波戸山の山麓に位置しており、水月寺の奥の院へと登る溪谷の入口に遷地されている。『太宰管内志』の連見郡・水月寺の項の國人伝に「津波戸山水月寺は豊後國立石の内にあり下より十八町上にありて堂は西向なり今は禪宗と成て古の鎮守堂などは残らず」とあり、また「津波戸海蔵寺は十八町上にあり曹洞宗にして南向なり寺より登八町にしておくの院あり観音の所に靈水常にこのかめに落入る事なり立石村の中に寶光坊と云山伏ありて是を守る」とある。すでに、江戸時代の後期には海蔵寺と水月寺の混同した見解が窺える。

今回の調査では、津波戸石屋、つまり水月寺奥の院と伝えられる洞窟を起点として、津波戸山道の溪谷を踏査し、六郷山寺院の一般的な伽藍配置の様相を鑑みた結果、津波戸山旧海蔵寺跡が津波戸山水月寺跡の参考地になり得ると解釈し、この一帯の平板実測を実施した。

第37図は実測図である。北側は山麓の丘陵面を半月形状に大きく削り取り、南側と東側を石垣で高く築き、平坦面を形成している。中央部に本堂・庫裡、北東隅に泉水、南東隅に鐘樓、西に弘法堂を設け、墓地は西隅の一角と北側の丘陵斜面部にある。中央の石段を下ると、石垣で区画

された平坦面が数箇所ある。これ等がいつ頃の造成かは判然とはしないが、建物跡をはじめ、墓地の祈念銘などはすべて近世～現代のものであり、北側の丘陵斜面部にある「古墓」も近世中頃のものであった。現在、中世まで遡る考古資料はなにもないが、上述した水月寺の千手観音の相伝や六郷山寺院の伽藍配置からみて、この付近がなお有力な推定地である可能性は捨てきれない。

経塚遺構

ところで、津波戸山出上の銅経筒が享保8年(1723)以前に発見されていたことは、下述する資料で明白であるが、発見場所、つまり経塚の位置は定かではない。しかし、今回の聞き取り調査で、経筒発見箇所の有力な推定地を確認することができた。

津波戸山水月寺の奥の院といわれる洞窟から、崖道をよじ登ると、津波戸山頂からならだかに傾斜した鞍部に辿り着く。その右手には、自然角礫を二つ立てて並べた小さな石室状の遺構(第40図)がある。自然角礫の一つは長さ約60cm、幅約8～20cm。もう一つは長さ約30cm、幅約12～25cmを測る。石と石の間は約30cm程度の空間があり、この部分は掘り窪められている。露出した部分の高さは約30cm前後であるが、土に深く埋もれている。この石室状の遺構の周囲は、自然の角礫で約3m四角に区画されている様子でもある。昭和の初め頃、長洲の入学正則氏(明治41年生まれ)等二人が飯盒を掛けるため、石の間を掘ったところ、木炭と一緒に八角形の鏡が出たという。鏡は最初は光っていたが、みるみる変色して黒ずんだという。鏡は当時の県庁や東京方面に送られて調べられたというが、現在の所在は確認出来なかった。

これが経塚遺構とは断定できないが、単独に営まれた経塚とすると、石室状遺構の重厚さは、他の経塚群より突出しており、経塚構築の初期に当たる津波戸山水月寺の経筒を埋納するに相応しいものといえよう。

(4) 津波戸山水月寺出上の銅経筒

津波戸山水月寺出土といわれる永保3年(1083)銘の銅経筒が享保年間以前に発見され、津波戸山観音御寶物として地元へ伝えられていたが、それ以降、二転三転し、現在芦屋市の個人蔵になっている。国指定の重要有形文化財である。

銅経筒は総高35.7cmの銅鑄製であり、筒身高31cm、筒身径10.5cmを測る。銅経筒としては重厚で際立った大型品である。蓋の一部は破損しているが、最大径は12.2cmで丸味を持つ単純な被せ傘蓋であり、頂部には括れ入りの宝珠撮みが着く。蓋と身の口部には、各々対になる緊縛用の細穴が開いている。底部は低い高台底であり、径11cmを測る。経筒は黒光りする黒色を呈し、表面は煤の様なものが沈着している。

経筒の筒身には釈迦三尊・多宝三仏・二比丘・四菩薩の線形画があり、筒身、筒底、筒内部口辺、蓋の内側には次のような銘文が刻まれている。

筒身には「如法書寫妙法蓮華經一部 並結集集一遍集各一卷 如法圖指佛菩薩各百體寶塔一基於中安置釋迦多寶二世尊像 左右扉普賢文殊種子書之 永保三年九月廿二日於津波戸山 供



第40図
津波戸山鞍部の石室遺構

養之願主 釋尊遺法弟子永尊並結縁大衆」

筒底には「紀行則□□未則・佛子親運・僧兼覺 紀□□・僧靜信 明元 秦氏 田部氏 觀縁」

筒内部口辺には「覺明藏経隨念□頼□・尼妙法・女童子宇佐氏・法橋良信・宇佐公相・尼妙深・
尼妙法・僧學眞・永・賢□・尊□永」

蓋の内側には「清原氏所生男女了等・紀行方・藤原基貞・□□氏所生子津守氏・宇佐時則・宇
佐氏弟所生男子女子素延□観□子□同□□□□□小□□□□□藤原金□」と刻まれている。

津波戸山出土の経筒は、大分県内最古の永保3年(1083)銘であり、その法量も、他の出土例に比較して際立って大きい。つまり経塚埋納の初期の段階には、銘文が示すように、経筒内には如法書写による妙法蓮華經一部と結縁集・一遍集各一卷、如法図・摺佛菩薩各百体、釈迦・多宝如来の安置された宝塔一基が納められていたことが判る。供養の願主は永尊と結縁大衆とあり、宇佐宮に關係する宇佐氏、清原氏、藤原氏、紀氏、津守氏、秦氏、田部氏等、神官・僧侶の名が所狭しと連記されている。千々和実氏は宇佐弥勒寺境内の水保元年(1081)の新宝塔院の建立を、法華信仰と弥勒信仰を融合する拠点とする契機にとらえているが、永保三年銘の津波戸山出土の経筒は、その結縁集の顔触れからもこれと關係の深い一大行事であったことが推察される。特に、紀氏の名は、保延7年(1141)銘の長安寺銅板経や求菩提山、彦山の銅板経にもみえ、宇佐宮とその領域の信仰形態が推察できる。

さて一方、この経筒に添えて伝えられた木簡には、「津波戸山観音御寶物経筒立石桶屋小助享保八年癸卯七月二十九日盜取候蔽しき御詮議の上差出候其節蓋此通り損候依て小助儀同年九月二十一日行死罪者也」「家老職 平山丈右衛門 同 安東治左衛門。目付役并尻守右衛門 郡役 土屋久左衛門。目付役 阿部喜右衛門 用番 三重弥左衛門」とある。津波戸山観音の宝物である経筒を立石の小助というものが盗み、蓋を破損した罪で享保8年(1723)に死罪になっている。現在、経筒の蓋には強烈な力が加わった破損箇所があり、上記の史実を裏付けている。

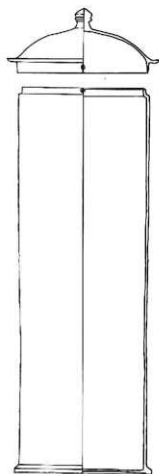
(注1) 千々和実「八幡信仰と経塚の発生 - 未法思想高潮の誘因統稿一」『日本仏教』第8号 昭和35年



第41図 津波戸山水月寺出土の銅経筒



第42図 津波戸山水月寺出土の銅経筒線刻阿弥陀



0 5 10cm

第43図
津波戸山水月寺出土の銅経筒 (1/3)

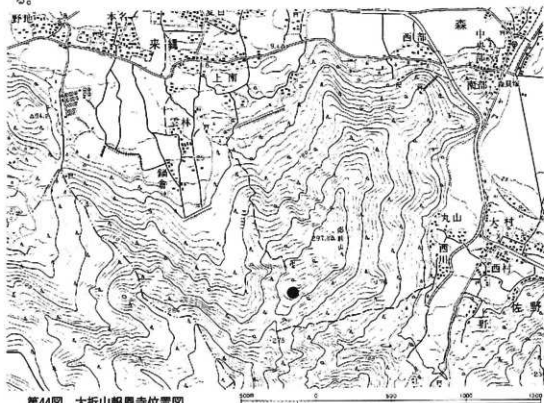
Ⅲ. 大折山報恩寺

(1) 位 置

J R日豊線の宇佐～立石間の東北側の山塊には、中央部にある華岳(593m)を最高所として西嶺山(571m)・後山(349.2m)・津波戸山(529m)などが連なる。この山塊のなかに六郷山本山本寺八カ寺のうち智恩寺・伝乗寺を除く六カ寺が分布している。報恩寺は、この山塊の北側の一角を占める豊後高田市大字米繩の応利山山頂部にある。

応利山は尾根筋を東北方向にとるさして高くはない山で、最高所は標高297.6mある。頂上から尾根筋を南西側にやや下ると鞍部があり別の峰へと連なっていくが、その尾根筋上の頂上と鞍部とのほぼ中間地点、標高にしておよそ260m付近に報恩寺ならびにその遺構がある。報恩寺へ至るルートは、米繩の上南から登るルートと裏側の佐野の丸山地区からのものがある。

米繩側から登るとおよそ1.8キロほどの行程で、観音像を安置した現在の報恩寺に達する。旧観音堂の跡(講堂跡)はそれからさらに0.1キロほど登った、山の裏側(佐野側)にある。途中の参道は少し大雨が降ると水路を兼ねる山道で決して楽ではないが、登り口から0.7キロほどの所に一石から成る宝篋印塔がある。ここを塔ノ隈と呼ぶ。さらに0.7キロほど登ると参道を挟んで石造仁王が立っている。また参道を通るように石垣が築かれていて、そこを相撲場といっている。



第44図 大折山報恩寺位置図

(2) 沿革

六郷山寺院としての報恩寺は、安貞2年(1228)の豊後国六郷山諸勳行並諸堂役諸祭等口録(『太宰管内志』所収)の本山分のなかに「大折山本尊聖観音・・・」と記載されるのが初見で、建武4年の六郷山本中末寺次第第IV至等注文案(『大分県資料(3)』所収)にもみえる。その後近世になって延宝年間(1673-81)に無方和尚が再興し黄檗派の禪宗寺院となった(『太宰管内志』)。この時期の伽藍について『太宰管内志』は、「・・寺は南向にして入り四間横六間の堂なり本尊は釈迦如来なり。これより一町余登りて講堂あり二間半四面。本尊一・一面観音なり。・・」と記述している。

昭和27年(1952)には再び天台宗に戻るが、大正8年(1919)に観音堂が山火事に遭い、現在地に観音像を移す。

(3) 遺構の状況

報恩寺の遺構は参道途中にある宝篋印塔および仁王像・石垣などを除けば、頂上部の2か所に集中している。米俣側から登るとまず現在観音像が安置されているお堂に到達する。傾斜面に石垣を築いて東西40m、南北27mほどの平場を造成している。参道に面した鐘樓門跡の礎石を通り過ぎると、南面するお堂の正面にでる。お堂は東西11.5m、南北7.7mの大きさである。大正12年に刊行された『西国東郡誌』には、当時の建物が次ぎのように記載されている。

一 本堂 間口7間3尺奥行4間 一 庫裡 間口6間奥行3間3尺 一 奥ノ院 一 風之神堂
現在の観音堂は規模から見ると以前の本堂の大きさに近い。

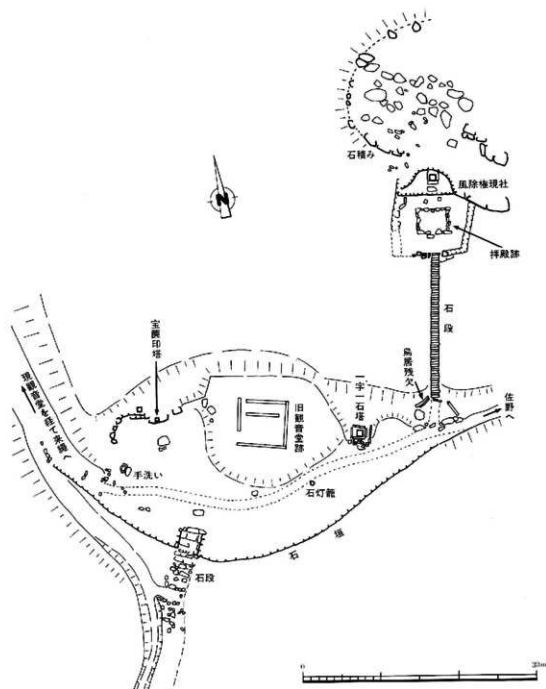
観音堂のある平場の奥には小さな水溜め池がある。この池から水を引いてすぐ下に何枚かの水田を営んだという。

山門側へ曲がらずにさらに参道を100mばかり上ると、旧観音堂の遺構があり続いて一段高い所に風除権現社が祭られている。前述したように、現在の観音堂は尾根筋に対して西側(高田市街地側)にあるが、旧観音堂は南側(佐野側)に向かっており、そちら側へ下る石段の参道がある。平場の造成は緩傾斜地におこなわれ、最も高い所でおよそ1.5mばかりの石垣を扁平な安山岩を積み上げて築き、東西30m、南北25mほどの広さの楕円形をしている。

観音堂の遺構は、平場のほぼ中央にある高さ0.3mばかり盛り上がった地影れの上ののっている6.2×6.1mの規模の地覆石である。安山岩の切石を用いている。この観音堂は前述した通り『太宰管内志』では講堂と呼ばれていた。2間半四面の規模をもち十一面観音が本尊である。

観音堂跡の周囲には近世の信仰を窺わせる石塔類が今も残っている。西側には低い石積の上に小さい石の祠と宝篋印塔、東側に一字一石塔・石灯籠などのほか、自然石を割り込んだ手水鉢がある。

観音堂のある平場の東端に風除権現社に通じる石段がある。上り口に壊れた石造烏居の柱と傘が散乱している。石段を上り詰めると、低い石積の垣を巡らしたなかに自然石を並べた地覆石が



第45図 大折山報恩寺の遺構

ある。大きさは正面4m、奥行き3.2mほどあり、後背の石積段上に祭られた風除権現社の拝殿跡と想定される。

風除権現社の背後は尾根筋の末端部に当たり西側が次第に低くなるが、半円形に巡る石列が観察される。上面は安山岩の露頭地らしく大小の岩石がほぼ一定の方向で走行している。尾根筋の北側斜面にやや離れて金毘羅社の小さい石祠が2基祭られている。

(4) 石造物

報恩寺に関する石造物は石垣・石段などの構造物を除けば、これまでにあげたように参道途中の宝篋印塔・仁王像のほか、観音堂跡の宝篋印塔・手水鉢・一字一石塔・石灯籠・石祠・石殿・鳥居残欠などがある。

このうち銘文のあるものを次に記す。

仁王像台石（未調査）

一字一石塔

奉書写一字一石大乘妙典堂部

元禄十二年

石灯籠残欠

奉寄進法華塔之灯籠

宝永四丁亥年 十一月吉日

賀米氏從者 道雪喜捨

風除権現社石殿

佐野村住人

文化八年未春

再建立 工師光門伸四郎

現住金峰誌之

鳥居額束

a 風除大権現

b 風主人権現

塔ノ隈宝篋印塔

寛文六戊

米縄住ノ國原□□

奉造立石塔ノ□□□□

八月吉日

(5) 仏像等

木造十一面観音立像 1 軀

神功皇后の塔 1 口 位牌形

室町時代後期

室町時代後期か



第46図 大折山報恩寺遠望（西北より）



第47図 大折山報恩寺参道



第48図 塔ノ隈宝鏡印塔



第49図 仁王像(叫形)



第50図 仁王像(阿形)



第51図
現観音堂
鐘樓門跡



第52図
現観音堂



第53図
旧観音堂地区
宝篋印塔・石祠



第54図 旧観音堂跡（地覆）



第55図 旧観音堂地区石段



第56図 石灯笼と一字一石塔（右側奥）



第57図 風除権現社と拝殿跡

IV. 西叡山高山寺

(1) 位置

西叡山(標高571m)は豊後高田市の南部にあって、大字佐野・小田原・嶺崎にまたがる。もともとの山は高山と呼ばれており、現在でも地元ではそう呼ぶが、地図などでは六郷山寺院の山号である西叡山が山名として定着している。山容はなだらかで、とくに頂上から北東側の中腹にかけて広い緩傾斜面がある。南西側は華岳(593m)につらなる。

高山寺については、『豊後国志』に「旧七堂伽藍有り。堂宇荘嚴、今廃す。礎石堂存す」とあり、また『太平管内志』にも「西叡山の跡は田染郷横峯村山上に在り。頂上に今も石のほこら残り。是より東一町許に高山寺の礎のこれり、山上聊くほかなる処にて東南に向へる所なり」と記載されている。この記述通りであれば、頂上の東側になんらかの遺構があることになるが、これまでにそのような遺構の存在は知られていない。また、今回の調査でも発見することができなかった。

現在、頂上から東北側の中腹にかけてのなだらかな場所(標高350m付近)に西叡山高山寺跡を示す標柱が立っている。付近一帯は一町歩以上の緩傾斜地が確保できるうえ、「寺山」・「寺床」あるいは「寺屋敷」などと呼ばれており、高山寺関係の何らかの建物が存在したことは確かであろう。現状では、地表でそれとわかる遺構はまったくないが、後で述べるように、中世ごろとみられる煮炊きに使用する粗製の土器が採集されていることはそのことを傍証しよう。ただこの場所が高山寺の中核となる伽藍のあった場所かどうかについては、六郷山の他の中核的な寺院の立地と比較するとき、中腹部の広い吹きさらしの場所はむしろ避けて、同じ中腹でも長安寺のように傾斜地や両子寺のように谷地形を選択していることが多いことは参考となろう。

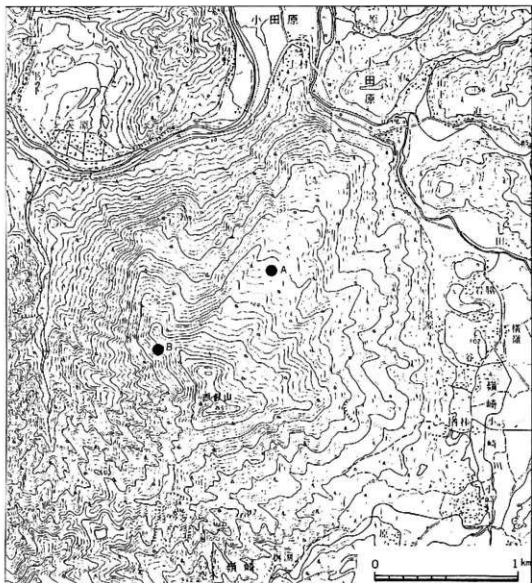
これまでの調査で土器などの遺物の採集地点が2か所ほどある。第58図Aは前述した標柱の立つ場所に近い林道沿いの地点である。またBは、頂上部から北西に延びる稜線を越えて僅かに西側に回り込んだ標高450mほどの地点である。この地点は「不動岩屋」と呼ばれ、傾斜の強い斜面を段状に造成して、確認しただけでも10か所以上の平場があった。その平場の一つからかつて白磁碗や土師器類が出土しているが、概して平場の規模が小さいこと、それらを結ぶ道がはっきりしないなど坊などの存在を考えるにはやや難点が多い。この地点の踏査は昭和59年ごろに行っていたが、今回の調査では、同じ場所に到達することができなかった。今後の精査が必要である。

(2) 沿革

六郷山本山本寺のひとつ高山寺(ないしは高山)についてはほとんど史料がない。名称の初見は、その成立年代に疑問がもたれている仁安3年(1168)の六郷二十八山本寺目録を除けば安貞二年(1228)の豊後国六郷山諸勤行並諸堂役諸祭等目録においてである。また、建武4年(1337)の六郷山本中末寺次第第IV至等注文案によれば、小山原助入道によって寺領を横領されている。

一山の規模を想定させる史料としては、『太宰管内志』所収の六郷山定額院主目録に「高山ノ養老寺院主實宅院ノ徒四五房兮同徒山廿五ヶ所」とあり相当の規模であったことを窺わせるが、養老寺あるいは實宅院についてまったく手掛かりがない。

中野隆能氏によれば、高山寺は六郷山灌頂所の役割を担っていたとされる。灌頂とは真言密教の儀式の一つで、大きく分けて伝法、学法、結縁の三つがあり、伝法灌頂は伝法阿闍梨となるもののために大日の儀軌明を授けるもので、真言の最極秘奥を伝えるもの。学法灌頂は、真言の行者となるもののために、ある有縁の一尊の儀軌明法を授けるもの。結縁灌頂は、広く仏縁を結ばせるために、一般の人に有縁の一尊の印と真言とを授けるものとする（『日本国語学辞典』）。



第58図 西叡山土器採集地点位置図

(3) 遺構の状況

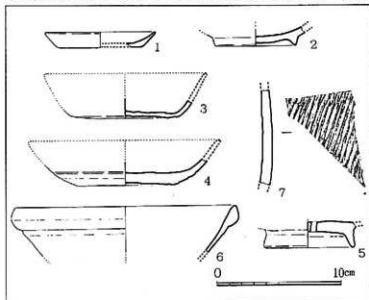
前述したように、今回の踏査では遺構を発見することができなかった。

(4) 遺物

遺物についても、今回の踏査では発見していない。したがって参考資料として昭和59年に採集した土器の実測図を掲載しておく。

土師器の小皿・杯のほか内黒の碗、底部に穿孔された高台付きの土器（脚付き皿か）、白磁碗、須恵器甕破片などがある。1の小皿は口径約9センチ、高さ1.2センチで底部は糸切りである。2の内黒の碗は断面三角形の低い高台をもち、この種の土器としては終末期に近いものである。3の杯は採集資料のなかではもっとも古い特徴を備えている。口径はおよそ13センチほどとなる。薄手の作りで底部はへらによる回転切り離しである。4は厚い底部をもち、体部は斜めに開く。口径は15センチほどになるとみられる。5は比較的高めの高台をもつ土器で、底部の穿孔や予想される体部の伸びぐわいからみて、脚付きの皿とみられるものである。6は口縁部が玉縁になる白磁の碗である。7は平行条痕風の叩きをもつ須恵器の甕破片で、内面はなで消している。

このほかに小破片のため図示できないが、東北側緩斜面で採集した粗製の土器がある。厚手でも非常に脆いので、恐らく煮炊きにする鍋のようなものであろう。



第59図 西嶺山採集資料 1・3～5は土師器 2は内黒土器
6は白磁 7は須恵器

これらの土器は、いずれも破片資料のため口徑など不確実な部分があるが、形態や手法からみて上限を9世紀代、下限を12世紀代と考えることができる。もちろん、この資料だけから高山寺の創建時期を云々することはできないが、先年発掘調査を行った同じ本山本寺の智恩寺の場合も、最も古い段階の遺物はほぼ同じ時期のものであったことからすれば、そのころに六郷山本山に属するいくつかの寺の活動が活発になったことは確かであろう。

なお、当資料館の収蔵資料のなかに高山の経塚出土の紙本経がある。昭和46年3月に出土したと伝え、銅製経筒をともっていたが現在では紙本経首部とともに散逸してしまっている。もともと一卷本で、末尾に「観普賢経」の文字がみえるので法華経八巻に開経（無量義経）および結経（観普賢経）を備えたものであったとみられる。失われた紙本経冒頭部分の写真が残っており、次のように記されていた。

中□天台僧良胤啓白/□□五年□□□三日六郷高/山□□□/為住 生極楽頓証菩提也
また、残存する紙本経末尾には、

観普賢経/□治五年五月十九日書了 天台僧良胤

とあって、両者を総合するとこの紙本経は「大治五年（1130）」に「天台僧良胤」が関係して「往生極楽頓証菩提」を祈願して「六郷高山」の経塚に埋納されたものであることがわかる。

この紙本経を納めていた銅製経筒は、写真から判断すると、節帯のない筒部をもつ傘蓋形式のもので、蓋にはやや大きめの台付き宝珠鈕がついている。残存する紙本経の量と一卷本ということからして、筒部の径は10センチ前後であろう。経筒には銘文はなかったという。

(5) 仏像等

高山寺の旧仏と伝えられる木造聖観音立像が高山の麓の豊後高田市大字小田原内野区に遺存している。樺材を用いた一木造。両腕および両足先を失い、顔面から腹部・下半身全面にかけて焼けた跡がある。現存像高193.0センチ。県の有形文化財に指定されている。

V. 大谷寺（小溪山大谷寺）

（1）位置と環境

山香町大字内河野字小谷に大谷寺（小溪山大谷寺）があったと伝えられているが、その位置は未だ確定していない。現在、大谷寺の観音堂という場所には、大谷山最大寺の木造業師三尊像や仁王像が移されており、昭和15年には、応安5年（1375）の国東塔もここに移されている。つまり、大谷寺（小溪山大谷寺）と大谷山最大寺は同じものと考えられている。

大谷寺（小溪山大谷寺）を記録の上でみると、

1. 安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等日録』に本山分・大谷寺、本尊十一面観音とあり、山王御寶前で二季神楽が行われている。
2. 弘安7年（1284）の『六郷山異國降伏祈禱巻数日録寫』に本山分・大谷寺。
3. 建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に木山末寺・大谷寺
4. 室町時代の『六郷山定額院主日録』に西塔山大谷寺正明院ノ徒十二房。
5. 後世の作といわれる仁安3年（1168）の『仁安三年六郷二十八山本寺日録』には木山分末寺・小溪山大谷寺とある。
6. 『太宰管内志』に、「弥山ノ文書」として大谷寺の焼失一件が記載されている。

（2）遺構の状況

大谷寺（小溪山大谷寺）であるが、字小谷地区には「堂」や「堂まき【脇か】」というしこ名で呼ばれている所があり、地元の人々は、その付近を寺の跡だと伝えている。現在、大谷山法勝寺の建つ西側の狭い谷の段々畑である。谷の北側の上り斜面には、個人が招致したという宮地嶽神社が祭られている。また、谷の西端の丘陵先端には、上述した応安5年（1375）の国東塔が本来立っていたという。一方、この丘陵の西側にも狭い谷部があり、ここには、小谷地区の権現様が祭られている。安貞2年（1228）の目録にいう「山王御寶前で二季神楽」はこの権現のことであろうか。今回の調査はこの付近の踏査を中心に行ったが、寺域の具体的な把握はできなかった。



第60図
小谷地区の丘陵先端にあつた
応安五年の国東塔

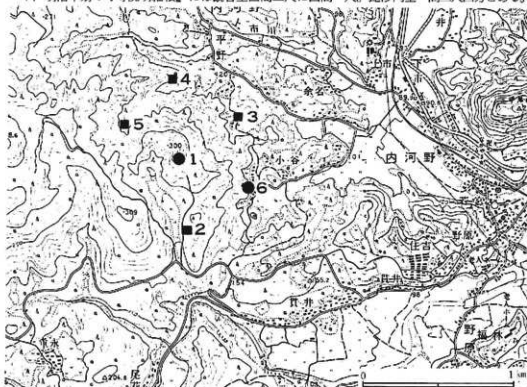
VI. 辻小野寺 (辻小野西明寺)

(1) 位置と環境

辻小野寺 (辻小野西明寺) は山香町大字内河野の標高約300mの辻小野山南側斜面に位置している。辻小野を地元の人々は「つじのう」と言っており、近世・近代の記録では辻野尾とも表記している。

辻小野寺 (辻小野西明寺) の遺構類を記録のうえで辿ると、

1. 安貞2年(1228)の『六郷山諸勤行並諸家役祭等目録』に本山分・辻小野寺、本尊千手観音とあり、六所権現御寶前で二季祭と五節供、三王御寶前で二季神樂が行われている。
2. 弘安7年(1284)の『六郷山異國降伏祈禱卷數目録寫』に本山分・辻小野寺。
3. 建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に本山末寺・辻小野寺、後山の末寺なりとある。
4. 後世の作といわれる仁安3年(1168)の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』には本山分末寺・辻小野西明寺とある。
5. 『天明年中六郷山寺院名簿』には速見郡山香郷辻小野山西明寺、日出額、山門末、本尊不動・本堂千手観音・毘沙門堂・山王権現・神樂堂・仁王門等が記載されている。
6. 『太宰管内志』の国人伝には、本堂の広さは四五間程度で寺は東向き、本尊は千手観音とある。また、「古は大寺なりしを今は荒蕪基し桜ノ馬場あり」という。
7. 明治中期の『寺院明細帳』には観音堂四間二尺に四間一尺。毘沙門堂一間三尺四方とある。



第61図 1. 辻小野山 (辻小野西明寺) 2. 桜馬場 3. 普門坊 4. 山ノ坊
5. 奥ノ院 6. 大谷寺 (小溪山大谷寺)

(2) 遺構の状況

現在の辻小野西明寺の寺域には、奥ノ院、山王権現、観音堂、毘沙門堂等があり、西明寺屋敷と呼ばれる坊跡等も遺存している。また、奥ノ院の裏手には経塚遺構群が営まれていることも判っており、後山の経塚群とともに、六郷山寺院の伽藍配置のなかでの奥ノ院とその周辺部に経塚の構築場所をパターン化して把握することができる。今回の調査は寺域の範囲を確認し、これを図化することで、今後の寺院研究の基礎資料とすることを目的としている。第63図は寺域の実測図である。

奥ノ院と経塚遺構群

西明寺の奥ノ院は辻小野山頂から緩やかに下降する自然の傾斜面に位置している。奥ノ院は幅約2.5m、奥行き約1.5mに角礫を基壇状に組み、四体の石造神像を祭る石祠を南向きに安置している。石祠には文政9年(1826)の銘がある。

奥ノ院のすぐ北側の緩傾斜面には、約400㎡の範囲に人頭大の円礫が散在しており、経塚の施設の破壊されたものであることが判る。現在、明らかに経塚遺構と断定できるのは4基存在している。これ等は盗掘を受けており、奥ノ院のすぐ後ろの2基には木炭が散乱していた。また、やや北側の2基には石室を構成していた偏平礫が確認できる。この付近で陶製経筒の破片と思われるもの(第74図1)を表採している。一方、奥ノ院の付近では経筒の蓋と推測できる土器片も発見されている。(第74図2)



第62図 辻小野西明寺の遠景(矢印)

奥ノ院の北側の上手に埋納された経塚群には、盛り土や標柱等はないが、奥ノ院と経塚の相対的な位置関係は、経塚群を意識して設定されたものと推察できる。つまり、奥ノ院の前で拝礼すると、必然的にそれは経塚を拝むことにも重なるのである。このことは、当初、奥ノ院が経塚の拝殿として意識されていたことを示唆していると推察できるのである。ここで留意されるのは、「六所権現御寶前で二季祭と五節供」を記載している安貞2年(1228)の日録である。現在、辻小野西明寺には六所権現がなく、それを設定できそうな場所も見当たらない。安貞2年の日録には六所権現御寶前と三王御寶前を併記しており、現在、奥ノ院と山王権現が信仰の対象である以上、強いてあげれば、六所権現の位置は、本来この奥ノ院の場所であったのであろうか。いづれにしても、奥ノ院とその周辺に営まれている経塚遺構群は興味深く、同様なことは、六郷山寺院の後山金剛寺、長安寺、旧千燈寺、横城山東光寺、高貴寺、津波戸山水月寺等を掲げることができる。

山王権現

奥ノ院より約30m南へ下った地点に山王権現がある。安貞2年(1228)の日録に「於三王御寶前、二季神楽」とある。また、「天明年中六郷山寺院名簿」には「神楽堂」とあり、山王権現の前に神楽堂が設定できそうである。平板実測図をみると、この付近は傾斜面に沿って「コ」の字状に削平されており、丘陵の端付近までの平地は、約300㎡の面積である。山王権現の祭られた社の部分は、石垣で心持ち高くなっており、面積は約60㎡である。現在は社を覆う覆い屋がある。

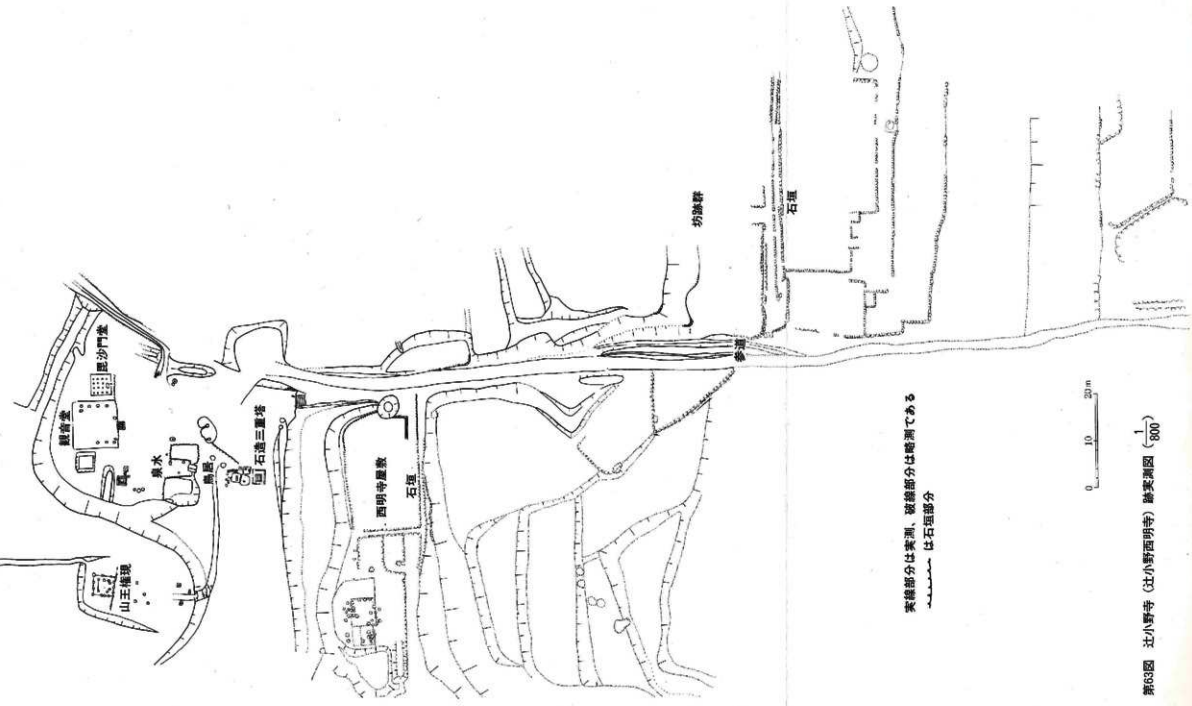
山王権現の社には「内河野村字辻野尾 奉新築神殿拝殿武宇」という明治十四年の札があり、金幣台には文政11年(1828)の「奉納御金幣」の記録がある。また、南端中央の石段付近には寛保3年(1743)の手水鉢と嘉永元年(1848)の石灯籠が一對ある。

観音堂と毘沙門堂

現在の観音堂は南向きで、三間四方の前庇付きであり、近世末から近代の建築である。安貞2年(1228)の日録に本山分・辻小野寺、本尊千手観音とある。現在の観音堂本尊は江戸時代(寶暦12年?)の千手観音であり、阿吽の木造仁王像、「浄明」名の木造僧形像なども安置されている。「浄明」は観音堂を再建したという内川野の地頭安倍九郎左衛門の法名である。また、最近建造された毘沙門堂には永久5年(1117)銘の木造毘沙門天像や寛延3年(1750)に、浦邊恵比須村の仏師伴蔵の修繕になるという二十八神像の内、十神像が保管されている。また、慶応年間(1868)の櫓口三輪をはじめ、慶応三年銘の鬼会式一式も伝わっている。

観音堂と毘沙門堂の建っている一帯は、緩い傾斜面を半月形に大きく削って平坦面を造り出し、北東側の一部は土塁状の高まりで区画している。観音堂の床下には永和2年(1376)の鳥居の断片がある。観音堂の西側には、5m四角の方形の壇や低い土堤が遺存しているが何に比定できるかは判らない。また、南西部には長方形の二つの泉水と太鼓橋のある庭園の跡がある。庭園の周辺には元禄3年(1690)、天明8年(1788)、寛政6年(1794)の石灯籠がある。また、泉水のすぐ東側には、元禄16年(1703)の石殿が安置された心持ち高い部分も存在している。この辺ま

経橋遺構群 (黒丸は石室)



実線部分は実測、破線部分は推測である
~~~~~は石垣部分

第63図 法小寺寺 (法小野西明寺) 跡実測図 (800)

第64図  
西明寺の現観音堂



第65図  
西明寺観音堂西側の石圍  
の基壇



第66図  
西明寺の石造三重塔と  
石造品





第67図  
西明寺の現山王権現



第68図  
西明寺境内の石積遺構



第69図  
西明寺の奥ノ院

で面積約1000㎡前後ある。

一方、観音堂の約20m南側には山王権現の鳥居の基礎が残り、その付近には、赤や黒で彩色した貞和4年銘(1348)の石造三重塔をはじめ、一辺2m前後の石組みの壇に高さ約1m前後の扁平自然石を立てた遺構が数基遺存している。壇内には小さな円礫を入れており、「一字一石塔」か「墓」と考えられる。ここには、明德元年(1390)銘の宝篋印塔の基壇や安永5年(1776)の西国納経供養塔、安永9年(1780)の西国供養塔、六地藏等が安置されている。石塔群の東の平場は約200㎡程度である。

#### 坊跡状の平坦面

観音堂から南へ約40mの地点で石段を下ると、緩い傾斜面に沿って、南へ一直線的に延びる参道跡が道の端に残っている。この参道の両側には坊跡と推測できる平坦面が複数遺存している。中でも、最上段の西側には「西明寺屋敷」と呼ばれる院主坊と推測される跡がある。坊跡は東西約60m、南北約15～20mの平坦面であり、南北の浅い中央側溝で西側と東側とに二分されている。坊跡の区画や基段は西側の部分に良く残っているが、竹林や雑木林が甚なお暗く生い茂り、実測図化することは不可能であった。

また、西明寺屋敷の北側上方の削平した斜面には地下式土壇と考えられる穴が遺存しているが、詳細は不明である。

西明寺屋敷より南方の低い部分をはじめ、参道の両側には約200mにもわたって南方へ下る階段状の平坦面がある。これ等の中には、屋敷の石垣やその施設を推量できるものもあり、近世～近代の坊跡と判断できる遺物を伴うものもある。

### (3) 表面採集遺物

辻小野西明寺の寺域調査中、経塚遺構群、西明寺屋敷の北側上方の平坦面、西明寺境内、参道東側の坊跡状遺構から次の様な遺物が発見されている。

1・2は経塚遺構群から発見されている。1は胴部径が約13cmの経筒の破片である。色調は小豆色を呈し、表裏は波打っている。盗掘された経塚付近で検出したもので、割れ口は新しい。2は奥ノ院で拾ったものである。口径8.6cm、器高4.6cmの上師器であり、底部は分厚く、糸切り底を呈する。経筒の蓋であろうか。12世紀前半代に比定しておく。

3は西明寺屋敷の北側上方の平坦面より採集した瓦器碗である。口径は13.2cm、器高は3.8cmを測る。底部の高台は低く、細く退化した様相を呈する。器表面は撫ぜ調整で内側は一部にヘラ磨きの痕跡を残している。前述した瓦器碗の編年によると、13世紀後半～14世紀前半に比定できる。

4は西明寺境内で採集した白磁片である。口縁は玉縁状を呈する。13世紀前後である。

5・6は参道東側の坊跡状遺構から出土している。5は底径17.6cmの土器である。底部や器表面は奇麗に削られた調整痕を残す。火鉢であろう。6は胴部の最大径が16.2cmの一升徳利である。





第70図  
盗掘された経塚

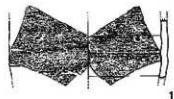


第71図  
盗掘された経塚



第72図  
西明寺屋敷の石壇

第73図  
西明寺の坊跡の石垣



1



5



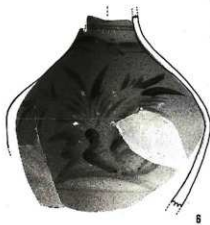
2



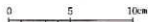
3



4



6



第74図 辻小野寺西明寺表面採集遺物 (1/3)

草花文の染め付けを施す伊万里焼きである。近世末～近代の所産であろう。

以上の様に、断片的な資料であるが、採集遺物の時代は12世紀前半、13世紀後半～14世紀前半、18～19世紀に比定できそうである。伊万里焼きを出土した坊跡は、西明寺屋敷のある段より、約100m下った参道の東側であり、近世～近代には坊が存在していたことが推察できる。

西明寺の寺域で聞き取りできたのは、「西明寺屋敷」だけであったが、「辻小野山縁起」によると「元龜中人友宗麟左道ヲ信シ佛像ヲ破毀ス此時成善坊觀行坊普門坊山之坊奥之坊地銀坊ノ六聖宅亦其災ニ罹リテ失亡ス」とあり、数多くの坊跡があったことが判る。辻小野山西明寺の周辺部の字図には山の坊、桜馬場が見え、山口には普門坊のしこ名も地元の人に伝えられている。また、奥境は奥ノ坊の跡であるともいう。これ等は辻小野山の麓を取り巻く谷間に位置を占め、西明寺の外坊と推察できる。現在の普門坊跡は目測で500㎡程度ある平坦地であり、その縁辺にはバラバラに成った五輪塔群が数えきれない程積まれている。またこの付近には板碑や五輪塔が転がっており、康永4年(1345)銘の板碑は留意される。

以上のように、辻小野山西明寺とそれに関する遺構をみてきたが、銘文等では永久5年(1117)が最も古く、12世紀前半から現在に至るまで寺院信仰に伴う何らかの記録の痕跡を留めている。記録のない13世紀は考古資料で埋められるとして、空白になる時期は15～16世紀である。上述した元龜年間(1570～1573)は16世紀後半であり、空白の期間と史実とのある程度のつき合わせが可能である。



第76図 辻小野西明寺出土遺物

## 第五章 辻小野西明寺の鬼会

### (1) 修正鬼会

他の六郷山寺院と同じく、西明寺でも修正鬼会を行っていた。修正鬼会は、その年の五穀豊饒・万民快楽などの祈願成就を目的とした年頭の修正会と、疫鬼を追い払う追儺（鬼会）とが合体した六郷山寺院独特の法会である。しかし、修正鬼会の「鬼」の性格はいつしか祖霊と習合し、現在はいわゆる「春来る鬼」という善鬼的な性格を持つに至っている。

本来、修正鬼会は各寺院が配下の坊の協力のもとに行っていたと考えられる。しかし、明治期になると、六郷山寺院は東組・中組・西組に分かれ、西組と中組合同の僧侶団と東組による一団とが、それぞれの寺院を巡回して修正鬼会を開催するようになっていた。六郷山西組と中組では、次のような日程で修正鬼会を開催していた。旧正月3日智恩寺／豊後高田市美和・4日寿福寺／真玉町白野・5日応曆寺／真玉町大岩屋・6日長安寺／豊後高田市加礼川・7日天念寺／豊後高田市長岩屋・8日無動寺／真玉町黒土・9日弥勒寺／真玉町城ノ崎・10日胎藏寺／豊後高田市平野・11日岩脇寺／豊後高田市巖崎・12日西明寺。西明寺の修正鬼会は明治37年頃に中断し、それ以後復活することなく現在に至っている。

昭和57年頃、本堂に修正鬼会の差定が貼り出されていた<sup>60</sup>。寺（僧侶）の役割分担を欠落しており、式次第しか記されていない。この差定には年月日が記されていないので確証はないが、明治後期の修正鬼会のもとと推測される。次の表は天念寺と西明寺の差定の相違を比較できるようにしたもので、太字は片方ない題目である。天念寺の題目数が22に対して、西明寺では14しかない。天念寺の序音・回向・呪諾・梵音・錫杖が西明寺では欠落している。三十二相・薬師散華（散華）・縁起（縁起日録）は神分の時に同時平行で行われる声明なので、西明寺では数に入れていないが、これを含めれば、題目は17となる。また、内容はわからないが、咒願・大懺悔など西明寺独特の題目も見られ、現行の天念寺などは少し内容の違う修正鬼会だったと思われる。

表1 修正鬼会差定の比較

| 天念寺     | 西明寺    |
|---------|--------|
| 1 伽陀    |        |
| 2 懺法導師  | 1 懺法導師 |
|         | 2 咒願   |
| 3 序音    |        |
| 4 回向    |        |
| 5 初夜    | 3 初夜次第 |
|         | 4 大懺悔  |
| 6 仏名    | 5 仏名   |
| 7 法咒師   | 6 法咒師  |
| 8 神分    | 7 神分   |
| 9 三十二相  | 三十二相   |
| 10 呪諾   |        |
| 11 散華   | 薬師散華   |
| 12 梵音   |        |
| 13 縁起日録 | 縁起     |
| 14 錫杖   |        |
| 15 米華   | 8 米華   |
| 16 開白   | 9 開白   |
| 17 香水   | 10 香水  |
| 18 四方固  | 11 四方固 |
| 19 鈴鬼   | 12 鈴口鬼 |
| 20 災払鬼  |        |
| 21 荒鬼   | 13 荒口鬼 |
| 22 鬼後咒  | 14 鬼後咒 |

## (2) 修正鬼会等の用具類

西明寺には修正鬼会道具が残されており、幕末から明治期の様相をしのばせてくれる。

### ①鬼会奉賀寄進帳

内河野山口の安倍浩家が保管する『鬼会奉賀寄進帳』の表紙に明治二十三年一月十五日と記され、一頁目に次のような趣意書が記されている。「辻小野山王権現宮者、昔仁門（間）菩薩之御開山ニテ、大古ヨリ鬼会祭有之哉ト聞傳候得共、其後中絶ニ相成居候処、又候天保年間之頃ヨリ再祭礼行ヒ来リ、悪病災難除ケニテ誠ニ祈□□之御祭ニ付、氏子貳拾戸之面々所々ニテ小戸之御助力ニ預リ、是迄毎年無□□鬼会祭施行致候得共、何分小村放手対不行届、本年ニ於テハ鬼会祭料充物之募集思立候間、村内並ニ他村ニ至ル迄、志之御方様ニハ多少ニ不限奉賀之寄附御記シ候下度、伏テ御依頼申上候也」

同年の寄附では、当時の山口全戸と思われる12戸から計3斗4升の米を集めている。

### ②鬼会式

鬼会の時に読み上げる『神分導師作法』『縁起導師作法』『仏名経導師作法』『初夜導師作法』などの4巻がある。『神分導師作法』奥書に「□時慶応二年寅九月吉旦普満願如ノ老納拜書ノ紀之新庄行邑ノ山口ノ幸右衛門調ス」、『仏名経導師作法』奥書には「維時慶応二年寅九月吉辰拜写ノ善満住侶願如ヌノ紀之新庄行邑ノ山口ノ幸右衛門宛記之」、『初夜導師作法』奥書には「維時慶応二年寅九月吉旦ノ善満住侶願如拜写ノ紀之新庄行邑ノ山口ノ幸右衛門宛記之」とある。また、『縁起導師作法』奥書には「干時ノ明治二十二己丑天ノ九月月中旬ノ胎藏寺現住ノ三部大阿闍梨円明院豪清謹書之」とある。

### ③鬼会面

西明寺には荒鬼2面・災払鬼2面・鈴鬼2面の計6面ある。

ア、「荒鬼面」顔面は胡粉下地に黒漆塗りで、眉・歯・唇・顎髭には朱漆を塗る。クスの一材を削り、眼球部には銅板を張る。卍形で上に牙が出し、一本角をほぞで接合する。耳は面の側面に作りつける。面長290mm・面幅249mm・面高140mm。裏面に次のような墨書がある。「明治十三年辰正月寄進ノ豊後國速見郡野原邑ノ帯刀久六 六十年ノ同國同郡同邑ノ何松浦吉紀昌盛 五十二年 明治四年の虎藩置県にともない日出県では里制が施行されたが、何松浦吉はこの時に野原村北部の助長に任命された人物である(3)。

イ、「災払鬼面」胡粉下地に朱漆塗り、眉・頬髭・顎髭には黒漆を塗る。クス材製。眼球部には銅板を張る。阿形で牙はなく、一本角をほぞで接合する。面長297mm・面幅243mm・面高153mm。耳は側面に作りつけ、面高を保つために面の両側に1材ずつ剥ぎ合わせる。

ウ、「荒鬼面」顔面は胡粉下地に黒漆塗りで、眉・歯・唇・顎髭には朱漆を塗る。クスの一材から削り出し、眼球部には銅板を張る。阿形で牙は上下に出し、一本角をほぞで接合している。面長295mm・面幅224mm・面高145mm。牛耳型の耳を紐で側面に結びつける。

エ、「災払鬼面」顔面は胡粉下地に朱漆塗りで、眉には黒漆を塗る。クスの一材から削り出し、

眼球部には銅板を張る。卍形で牙が上下に出し、一本又角をほぞで接合している。面長 287mm・面幅 224mm・面高 153mm。耳は牛耳型をしており、面の側面に紐で結びつける。

オ、カ、「鈴鬼面」2面顔面は胡粉下地、髪・眉・小鼻の両脇には黒漆を塗る。後に瞳の孔を削って大きくしているので、面貌に大きな変化が生じている。両頬にえくぼが刻まれ、口元を深く窪めて笑みをたたえた表情に作る。口を少し開いた阿形の面は、面長 219mm・面幅 157mm・面高 90mm。口を閉じた卍形の面は、面長 219mm・面幅 164mm・面高 86mm。

アとイの荒鬼面は面構成が比較的単純である。ウとエの荒鬼面は髭や眉の皺の表現が渦巻き状で複雑で、長安寺のものと似ている。しかし、作風は違うが、当時の神楽面に通じる製作技法がほぼ同一であることから、アとイの鬼面の製作時期から、ウとエの鬼面はさほど遅らない時期に製作されたと考えられる。慶応三年(1867)に鬼会式や幟が新調されていることから、この時に作られた可能性が高いと思われる。荒鬼系の4面は1本角である。しかし、面に新旧2種の別があるのに、透漆塗りの角の作りは同じである。これは角が明治13年に新旧の面ともに製作されたためと思われる。また、鈴鬼面は、作り或使用痕などから、後者(占面)と同時期に同作者によって作られたと考えられる。普通、鈴鬼面は男女一対であるが、西明寺の鈴鬼面は形態が似ていることから男女の別を判断しにくい。西明寺の鬼会面には荒鬼系の鬼面が2組4面あるが、基本的には荒鬼(災払鬼)二人と鈴鬼二人の組み合わせであったと思われる。

#### ④護符版木と朱印判

ア、「修正鬼會御祈禱札 西明寺」(表) 「鬼會燈明御志願 西明寺」(裏) 堅木の厚板の表裏に刻まれた護符の版木で、修正鬼会の時に配布される。418×86×30mm。

イ、「御祈禱御札 辻小野山 西明寺」(表) 「角大師の繪姿」(裏) 元三(慈覚)大師の異様な姿を移した角大師(豆大師ともいう)の繪姿の版木。「辻小野山」の部分は「御祈禱御札 西明寺」の右手に陽刻されている。版木の左側が削り取られているので、左側の文字は不明である。角大師繪姿の護符を門口に貼って魔除けにするものだが、これも修正鬼会の時に配布された可能性は高い。350×105×42mm。

ウ、「梵字(バン)修正鬼會札(角大師の繪姿)」 上部に梵字(バン=大日如来)、下部に角大師の繪姿が陽刻されている。台形の枕状の堅木の一面に刻まれている。これも修正鬼会の時に配布された護符の版木である。アの「修正鬼會御祈禱札」とイの「角大師の繪姿」の集合版である。252×97×75mm。

エ、「西明寺/辻小野山」(朱印判) ツゲ材で作った朱印判。比較的新しいものかと思われる。36×36×60mm。

オ、「辻小野/山王権/現宮印」(朱印判) やや黒い緻密な材で作った朱印判。これも新しいと思われる。30×30×30mm。

ア～ウの護符5種は同時期に用いられたものではない。ウの護符はア(表面)とイ(裏面)を組み合わせ、版木自体も台形の間に合わせと思われるもので、これはアとイの版木とウの

版木は時期を別にするとと思われる。

#### ⑤剣と斧

剣（不動刀）は荒鬼、斧（マサカリ）は災払鬼の採物で、2組ずつある。アとイは堅い雑木製で、造りもよく、黒光りした使用痕がある。ウとエはスギ材を用い、造りも粗木で使用痕は少ない。このことから前者が古いと思われる。

ア、剣（旧）全長620×全幅68×全厚45・雑木。

イ、斧（旧）柄長394×刃高145×全厚50×刃長105・雑木。

ウ、剣（新）全長597×全幅68×全厚36・スギ。

エ、斧（新）柄長480×刃高150×全厚32・刃長57・スギ。

#### ⑥鬼会装束

荒鬼災払鬼用と鈴鬼用の装束とがある。荒鬼の装束は墨染めで灰色、災払鬼の淡染めで褐色である。いずれも木綿製で、筒袖の短着にモモヒキの組み合わせとなる。鈴鬼の装束は草花文型染めの木綿布で作られた筒袖の短着で、着用法は黒い僧衣の上に羽織るので、下袴はない。薄い墨染めの短着1着・下袴3着。濃い墨染めの上下1着。薄い淡染めの上下1着。濃い淡染めの上下3着。鈴鬼用短着2着。草鞋2足。

#### ⑦松明

現在、天念寺などの修正鬼会で用いられている小松明は、割り竹をカズラで束ねたものである。しかし、西明寺に残されている小松明は木製で、手元を握りやすいように細く削り、燃えやすいように先端を割っている。長さ112cm・100cm。豊後高田市加礼川の峯ん坊（長安寺の坊）で採集した木製松明（長安寺修正鬼会用と伝える）と同様な形態をもつ。すくなくとも明治期には木製の松明が一部に使用されていたことは間違いない。

#### ⑧香水棒

ヤマハゼの木屑を削って四段に削り花をつけたもの。虫喰い等で削り花部分は相当傷んでいるが、天念寺で現在使用されている香水棒と酷似する。鬼会後半の立役の時に僧侶が持って踊る法具。長さ78cm。

#### ⑨締太鼓

削り貫きの太鼓胴に次のような墨書がある。「辻小野山／慶應三丁卯年正月十日／新庄山口幸右衛門／卯日／卯日鬼」末尾の「卯日／卯日鬼」とは、慶應3年正月12日丁卯の日に鬼会が行われたという意味であろう。鬼会の読経の時のお稚子の楽器（締太鼓・笛・鉦）のひとつである。太鼓胴直径260×高さ150mm。太鼓皮の直径約330mm。

#### ⑩鉦の撞木

鉦の撞木の柄に「明治廿八年正月十二日」「速見郡中山香村 新庄□太郎作之」という墨書があり、これも明治28年の修正鬼会の際に製作されたと思われる。

#### ⑪織

木綿布の織で、次のような墨書がある。「奉寄進 慶應三年丁卯年／三月吉日／願主／辻小野

村／瀬助」63cm×243cm。

#### ⑬峯入柱銘

右側の奥から2本目の柱に、次のような六郷山峯入りの柱銘が記されている。

|                 |       |
|-----------------|-------|
| □□六突 大先進行入寺豪□   | □□寺豪順 |
| 六満山仁聞菩薩古跡入峯行者拾□ | 千灯寺□昌 |
| 二月□□□ □□両子寺豪千   | 興導寺豪□ |
|                 | □□寺□□ |

智恩寺の柱銘などと比較すると、この柱銘は嘉永6年（1853）の峯入りの時に記されたものであることが判明する。この時には西明寺も峯入り順路に入っていたのであろう。

#### ⑭長机

観音堂に付属する倉庫の中に長机が数台あり、その天板の裏に「昭和二十七年五月五日／探燈護摩記念／謁諱信院順正代」とあり、昭和二十七年に当時の兼務住職であった胎蔵寺の今熊順正師によって、西明寺で探燈護摩が行われたことがわかる。

#### ⑮鬼面

山王権現社に奉納された鬼面。神楽面系の鬼面で、二角鬼であるが、向かって右側の角が欠落している。角以外はクス材の一本から削り出し、顔面全体に直接墨を塗った痕跡があり、眼球部分には胡粉を塗る。使用痕がわずかに認められるが、奉納面の可能性は高い。面長220mm×面幅186mm×面高90mm・角長90mm。

### （3）鬼会から見る幕末期から明治期の西明寺

戦国期の争乱の中で荒廃した西明寺は、近世前期に安倍氏の手によって復興された。安倍氏の奉納した3点の駒口に、慶長3年（1598）・元禄10年（1697）・同12年の銘がある。歴代住職の墓地在確認されていないので、近世の住僧に関する情報は明確ではない。本章に2基の位牌が残されている。「享保六年（1721）丑天／（キリク）中興権大僧都豪賢法印大和尚位／十月五日」と「（キリク）権大僧都豪賢法印大和尚位」である。後者は紀年銘がないので、何時のものか不明である。いずれも、近世の六郷山天台宗寺院に多く見られる僧名の「豪」という字を用いており、権大僧都・法印大和尚という僧階によって、天台宗系の僧侶であることは間違いないと思われる。豪賢の位牌によれば、1700年前後に西明寺が再興されたと思われる。しかし、天保年間（1830～44）には西明寺の荒廃ぶりが目についたようである<sup>19</sup>が、この頃に鬼会が復興されたとも伝える。次の画期は慶応年間（1865～68）である。慶応2年に鬼会式の「神分導師作法」「仏名経導師作法」「初夜導師作法」が書写され、慶応3年には締太鼓と轆が奉納されている。鬼会式を書写したのは「普満住侶顕如」で、願主は山口の幸右衛門であった。顕如は大字内河野字階廻にある善満寺（曹洞宗）の住職だったと思われる。当時の西明寺は無住だった可能性は高い。無住の西明寺で修正鬼会の道具類（鬼会面も含まれるか）を新調しているのである。これは六郷



山寺院相互の鬼会開催方法が幕末期まで溯る可能性を示唆している。明治13年には、新しい荒鬼と災払鬼の鬼面（装束・採物も）が、野原村の人達によって奉納されている。これは何らかの祈願のための奉納ではなかったかと思われ、近世の西明寺を守ってきた山口地区の人ではないことは注目される。明治4年の『天台宗本末寺帳』によれば、当時の西明寺の住職は長安寺住職賢孝が兼務していたという。古い方の荒鬼・災払鬼の面の特徴が、長安寺のものと類似することは、幕末期から明治初頭の西明寺を長安寺住職が兼務していたからだと思われる。また、明治22年の『縁起導師作法』が胎藏寺住職豪清によって書写されており、この頃には西明寺の兼務住職は胎藏寺に移っていたと思われる。昭和27年の探灯護摩も胎藏寺住職の今熊順正師によって行われているので、戦後まで胎藏寺住職が兼務していたことがわかる。

注(1) 小玉洋美『民俗文化財関係調査報告』「六縣諸山関係文化財総合調査概要(三)」1982  
大分県教育委員会。

(2) 衛藤實史『国東半島の鬼会面—形態による分類(2)』「別府大学紀要第22号」1981

衛藤氏は「西明寺の発地が明治元年であるので、〇-1・2（アとイの鬼会面）を他寺の面と推定してよい」というが、西明寺修正鬼会は明治37年頃まで行われており、この2面の鬼会面の奉納者が西明寺の東方2の野原村の住人であることから、この説の根拠は薄い。

(3) 伊藤常足『太宰管内志』天保12年（1841）



第76図 護符版木

第77図 刺と鉞

最右 刺 (ウ、新)  
中右 刺 (ア、旧)  
中左 鉞 (エ、新)  
最左 鉞 (イ、旧)



第78図 荒鬼面（ア）



第80図 荒鬼面（ウ）



第79図 災払面（イ）



第81図 災払面（エ）

## 第六章 六郷山寺院の調査成果と課題

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では平成4年度から3か年かけて、国東半島の山岳地帯を舞台に展開した「六郷山寺院遺構確認調査」を実施する予定である。六郷山寺院は、宇佐八幡を起点として、国東半島の西側に木山、中央部に中山、東側に末山が分布している。早くても室町後期以後の成立であろうといわれる『仁安三年六郷二十八山本寺目録』によると、「序分木山」8か寺・「木山分末寺」18か寺、「正宗分中山」10か寺・「中山分末寺」10か寺、「流通分末山」10か寺・「末山分末寺」8か寺に分類されている。つまり、木山は26か寺、中山は20か寺、末山は18か寺であり、合計64か寺となる。

中野峰能氏は『八幡信仰史の研究上下巻』において、これを三山組織と捉え、それぞれの機能分化と共に本山→中山→末山へと創建の時間的な変遷を指摘している。

今年度の調査は、安貞2年(1228)の『六郷山諸動行並諸堂役祭等目録』の本山分を主体として、後山石屋(後山金剛寺)、津波戸石屋(津波戸山水月寺)、大折山(大折山報恩寺)、高山寺(西叡山高山寺)、辻小野寺(辻小野西明寺)、大谷寺(小渓山大谷寺)の6か寺を調査対象とした。その成果の詳細は既に前述したとおりである。

ここでは、考古学的な調査成果の要点を箇条書きにし、整理してみる。

### 1. 後山石屋(後山金剛寺)

1. 現在の薬師堂、つまり後山石屋の反対側の北向き斜面部(デーモンベラ)に、石段の参道を持つ後山金剛寺の伽藍配置を300mにわたって確認できる。
2. 後山金剛寺の参道の両側には十数段の平坦面があり、石垣や泉水を施す坊跡群、建物の土堤を残す講堂跡と推察できる平場が遺存している。『六郷山年代記』には建保三年(1215)に講堂焼失、建長6年(1254)に講堂供養が記されている。坊跡出土の考古遺物は12世紀～14世紀のに比定でき、文献資料との矛盾はない。
3. 後山金剛寺の最頂部の尾根には東・西幅約60mにわたって経塚遺構群が所在している。現在、4か所に偏平礫の小石室が遺存している。盗掘されており、周辺には多数の偏平礫が散乱することから、数十か所の経塚が存在したことが推測される。陶製経筒片を表面採集している。
4. 後山金剛寺のいわゆる奥ノ院と称すべき場所と経塚の位置には次のような密接な関係が認められる。後山金剛寺最頂部には平場があり、これが「安貞二年の目録」にいう六所権現であると仮定すれば、経塚群はこれより上方の頂に位置しており、六所権現はその鎮守であり礼拝施設の一つとも想定できる。
5. 安貞2年の『目録』には六所権現と権現が併記されている。これが別個の施設であるとすると、権現は後山金剛寺の西側の山頂にある権現様の伝承地がこれに比定できる。この権現には異国降伏の折衝を示唆する伝承がある。

## II. 津波戸石屋（津波戸山水月寺）

1. 現在、津波戸山水月寺の奥ノ院といわれている津波戸石屋があるすぐ下の谷筋には狭い坊跡がある。「豊鐘善鳴録」にいう津波戸院の可能性が高い。
2. 津波戸石屋の上方、津波戸山の鞍部には偏平礫が石室状に置かれた場所があり、昭和の初め、この中より木炭と共に八稜鏡が発見されている。津波戸山水月寺出土の永保3年（1083）銘の経筒が本来埋納されていた経塚の可能性もある。
3. 「安貞2年（1228）の日録」によると、六郷山寺院の奉巡礼や如法経書写の発生が津波戸石屋であったことを意味しており、県内最古の永保3年（1083）銘の津波戸山水月寺出土の経筒は、この事実を裏付けているといえる。

## III. 大折山（大折山報恩寺）

1. 本来、大折山報恩寺の建っていた傍らには、風除権現が祭られており、その上手の山頂部には意図的に巨石を並べた場所がある。何らかの信仰に伴う所産であろう。

## IV. 高山寺（西叡山高山寺）

1. 高山寺の石碑が建っている場所より、数百m南西部の斜面に13世紀前後の土器が採集できる所がある。今回は辿り着けなかったが、この付近に寺域の一端が推測できる。

## V. 大谷寺（小溪山大谷寺）

1. 現在の大谷山法勝寺の西側の小谷に「堂」や「堂まき〔脇か〕」というしこ名が残っており、応安5年（1375）の国東塔が本来建っていた場所を含めて、その付近に大谷寺を想定できそうである。

## VI. 辻小野寺（辻小野西明寺）

1. 現観音堂の南側の緩傾斜面には、参道が断片的に残っている。参道の両側には坊跡が在り、約300mの伽藍配置を呈する。無住であるが現在まで命脈をたもってきた寺である。近世末～近代まで人が居住していた坊跡もある。
2. 最上段には西明寺屋敷と呼ばれている院主坊と推察される坊跡がある。西明寺屋敷の北側斜面には地下式土壇と推測できる遺構が遺存している。
3. 現観音堂の西側の緩傾斜面には山王権現、その上手には奥ノ院がある。奥ノ院のすぐ裏側には経塚遺構群が位置している。経塚群の一帯には河原礫が散乱しており、最近の盗掘の痕跡が生々しく残っている。盗掘によって木炭が散乱した場所が2～3箇所あり、偏平礫も数枚点在している。陶製経筒片を表面採集している。
4. 問題は寺域の中で、経筒の埋納行為を行った経塚の配置場所である。奥ノ院や山王権現で拝礼すると、必然的に経塚を拝む結果となり、奥ノ院は礼拝施設が祭壇の様相を呈する。奥ノ院と経塚埋納との有機的な因果関係が暗示される。
5. 安貞2年（1228）の『日録』に「六所権現御寶前で二季祭と五節供、三王御寶前で二季神楽」とあり、六所権現と山王権現が記録されている。現山王権現の前には神楽殿を想定できる広場がある。一方、六所権現は現在不明であり、それに相当する場所もみつけ難い。奥ノ

院の位置をこれに代替して考えることは出来ないであろうか。

6. 辻小野山を取り巻く谷間には、山の坊、山口、奥堤、桜馬場の小字があり、山口には普門坊のしこ名がある。奥堤は奥ノ坊の跡であるとも言われている。これ等は元龜年間（1570～1573）に亡失したという『辻小野山縁起』の記録と符合する外坊名である。

以上のように、今年度の調査成果や問題点を幾つかにまとめてみた。ここで極めて注目されるのは、後山金剛寺と辻小野西明寺の寺域で新たに発見された経塚遺構群である。経塚は、伽藍の最奥部の高所に構築されている。つまり、津波戸山の鞍部に構築された石室状遺構を水月寺の経塚とすると、六郷山寺院の伽藍配置と経塚の埋納地点に、ある共通点を指摘することが出来る。

六郷山寺院は緩斜面の浅い谷部に展開する場合が多いが、その基本的な伽藍配置は、直線的に延びる参道両脇に階段状の坊があり、その上手に講堂、最奥部に六所権現・山王権現・薬師堂などの奥ノ院と総称される信仰対象がある。そして、奥ノ院とその周辺部の上手、つまり、尾根状の鞍部に経塚が営まれているという構造である。これを図式的に示すと、六郷山寺院は下手から「坊→講堂→奥ノ院（六所権現・三王権現・薬師堂等）→経塚」という基本構造となる。このことは、現在確認されている六郷山寺院、長安寺・日千燈寺・富貴寺・構城山東光寺等でも同じである。

そこで問題なのは、奥ノ院（六所権現）と経塚との相対的な位置関係である。後山石屋（後山金剛寺）の項4と辻小野寺（辻小野西明寺）の項4で指摘したように、経塚の位置は奥ノ院（六所権現）の上手の高所にあり、奥ノ院（六所権現）で拝礼すると、意識するとしないに係わらず必然的に経塚を拝む結果となるのである。このことは、経塚の位置と奥ノ院（六所権現）の位置とが有機的に関連しており、経塚礼拝施設や祭壇の役割を兼ね備えているとも、奥ノ院（六所権現）があたかも経塚そのものを象徴するものとも解釈できそうである。

これまで、六郷山寺院と経塚との関係はあまり重視されてこなかっただけに、今回の六郷山寺院の調査成果としては、「まず経塚ありき」という六郷山寺院の成立に係わる視点を付け加えたことであろう。

引用・参考文献は伊藤常足『太宰管内志』、渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成、豊後国史料』の各巻収録のものであることを明記する。また志手環編『山香郷土史』、『山香町誌』、古麻鶴岩八『豊後立石史談』、『田染村志』等も参考とした。

---

大分県立宇佐歴史記の丘  
歴史民俗資料館報告書第12集

## 六郷山寺院遺構確認調査報告書 I

平成5年3月31日

発行 大分県立宇佐歴史記の丘歴史民俗資料館  
〒872-01 宇佐市大字高森字京塚

TEL 0978 (37) 2100

印刷 松原印刷  
宇佐市大字長洲548の1

---

